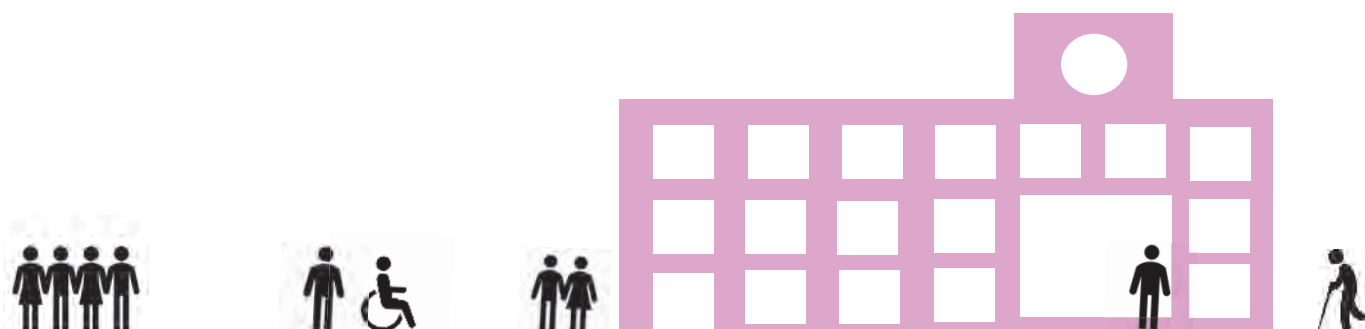


令和6年度（2024年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—



2025年2月
令和6年度インクルーシブ・プログラム開発事業
相模原市・相模女子大学

令和6年度（2024年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業
「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—

目次

ご挨拶	・・・・・・・・	1
実践報告	・・・・・・・・	2
・プログラムの概要	・・・・・・・・	3
・当事者のための生涯学習の場である「オープン・セミナー」 （「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」）	・・・・・・・・	6
・ゼミ活動	・・・・・・・・	11
・当事者による調査・研究活動である「リサーチ」 （インクルーシブ・リサーチ）	・・・・・・・・	14
・当事者による普及活動：インクルーシブ・メディア活動の成果	・・・・	20
・学び続ける大切さを伝える「啓発講座」	・・・・・・・・	31
・令和6年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会	・・・・・・・・	33
・2024年度インクルーシブ・プログラム開発事業総括	・・・・・・・・	38
・広報・メディア掲載（プレスリリース）	・・・・・・・・	40
・学会・出版物への掲載（2024年度）	・・・・・・・・	42
おわりに	・・・・・・・・	43



ご挨拶

日頃から、相模女子大学・相模女子大学短期大学部の教育活動に対し、ご支援を賜りましてまことにありがとうございます。

相模原市と本学は、令和3年度より文部科学省による「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」に協働で取り組んでまいりました。このたび、4年目となる令和6年度の成果を報告書の形にまとめてお目にかけることになりました。

本学は来年度に創立125周年を迎えますが、多様性を包含した生涯教育の検討は、本学の社会貢献の一環としても大きな課題であり、その意味でも、この研究活動は本学にとっても重要な取り組みと考えております。これまでの実績にさらに積み重ねられた今年度の研究成果に基づき、持続可能な事業実施体制を構築し、さらなる生涯教育の充実をめざしてまいりますので、引き続きご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、相模原市をはじめ、この実践研究に関わってくださったすべての方々に厚くお礼申し上げます。

令和7年2月

相模女子大学
相模女子大学短期大学部 学長 田畑 雅英

實踐報告

プログラムの概要

相模女子大学 日戸由刈

わが国では障害者権利条約を批准したにも関わらず、知的障害の若者が大学で学ぶ機会は非常に限られている。相模女子大学では、2021年度より発達障害や軽度知的障害の若者（当事者）と学生がともに学ぶインクルーシブな生涯学習プログラムの開発と効果検証に取り組んでいる。効果検証の指標は、当事者・学生双方による主体的な活動、及び自ら発信する機会が増えることと考えている。本稿ではプログラムの概要を説明する。

1. プログラムの基本構造

本学で開発中の「インクルーシブ生涯学習プログラム」（生涯学習プログラム）は、相模原市が文部科学省から委託されて行う「インクルーシブ・プログラム開発事業」の一部であり、相模原市からの再委託により実施している。その基本構造は下図の通りである。

相模原市では、本学への再委託の他、発達障害支援センターを中心に広く市民を対象とした啓発講座や関係機関・当事者・学生で構成される連携協議会の開催、広報活動など、知的・発達障害の若者と一般の若者がともに学べる社会を目指した活動を展開している。

本学の生涯学習プログラムは、行政による後方支援と当事者・学生によるエンパワメント活動の両者に支えられ、年4回のセミナー活動を展開している。プログラムの運営体は4つの活動にわかれ（次頁の表を参照）、それぞれ担当コーディネーターをおいて実施している。

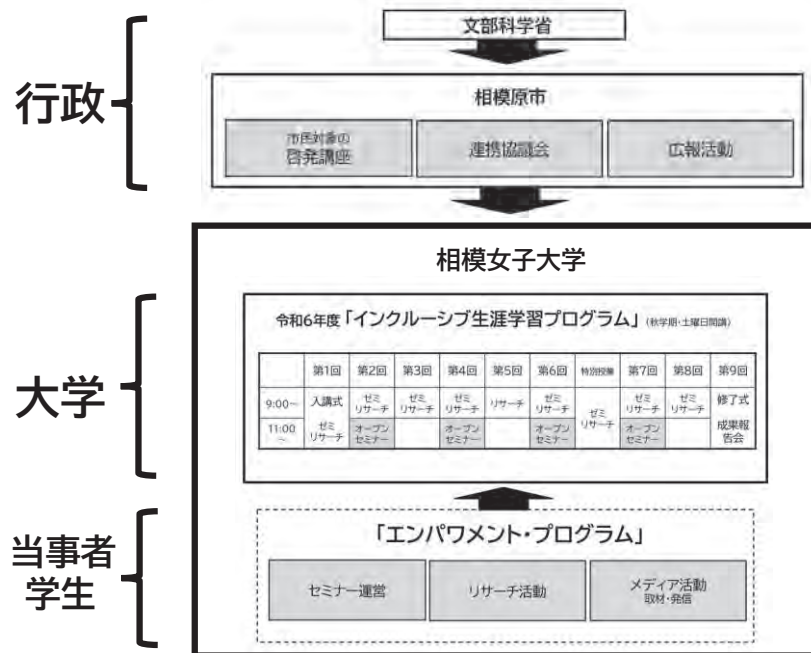


図 相模女子大学「インクルーシブ生涯学習プログラム」の基本構造

表 「インクルーシブ生涯学習プログラム」を構成する4つの活動

活動	概要	参加実人数
オープン・セミナー	障害の有無や性別に関わらず、若者なら誰でも無料で参加できる(事前申込制)。大学教員の講義、就労ワンポイント、趣味自慢タイムの3部構成。 本プログラム立ち上げ当初は協役的活動であったが、現在は生涯学習プログラムの中核的活動と位置づけている。	当事者、学生 卒業生など 各回約25名 (2024年度)
ゼミ活動	本プログラム開発の立ち上げ当初から行ってきた、当事者と学生の固定メンバーによるクローズドな活動。この活動で当事者と学生のフラットな関係形成が検証されたことから、今日の生涯学習プログラムに発展した。	当事者4名、 学生4名 (2024年度)
リサーチ	本プログラム開発が本格稼働するにあたり「我々のことを、我々抜きで考えないで」という障害者権利条約の理念を具現化する目的で結成された。メンバーは本学で学びや交流への意欲が高く、かつ裏方的な活動にも意義や楽しさを感じることで当事者・学生に声をかけている。	当事者5名、 学生3名 (2024年度)
メディア	リサーチメンバーのうち、本プログラムの魅力を発信することへの関心や意欲が高い当事者に声をかけている。動画作成ボランティアのサポートを得ながら主体的に活動している。	当事者2名 (2024年度)

2. プログラム開発の経緯の概略

2019年度、横浜市立若葉台特別支援学校(横浜わかば学園)を定年退職した川口信雄氏の熱意に押され、筆者のゼミ生と福祉施設を利用中の知的・発達障害の若者との交流機会(ゼミ活動)を開始。また本学主催「さがみアカデミー」にてオープン・セミナーを開始。セミナーには横浜わかば学園の卒業生が参加し、リピーター参加者となった。

2020年度、前年度のリピーター参加者たちに声をかけ、コロナ禍、オンラインでのゼミ活動を実施。学生と当事者がフラットな関係性を築き、ともに学ぶことができることを、川口氏とともに検証した。相模原市発達障害支援センターと連携し、オープン・セミナーを市のピアサポート事業と関連づけ市主催での開催を計画した(コロナ禍のため中止)。

2021年度、相模原市が文部科学省からの委託を本学に再委託する形で、市と大学の協働によるプログラム開発を開始。川口氏はその連携協議会会長に就任。学内で学長直属サブワーキンググループが立ち上がり、副学長が代表、生涯学修支援課が事務局を担当する体制となった。インクルーシブ・リサーチを立ち上げ、メンバーは連携協議会の開発協力委員に就任し、市や大学の関係者に向けて意見を述べる立場となった。

2022年度、山梨英和大学准教授(当時)の武部正明氏がコーディネーターに就任し、本学主催によるオープン・セミナーが再開。インクルーシブ・メディアを開始し、メンバーは

報道関係のプロから系統的な指導を受けた。年度末に初めて修了式を行い、学長がゼミ活動やリサーチのメンバーに修了証や感謝状を授与した。

2023年度、相模原市発達障害支援センターが啓発講座を開始し、市内の知的・発達障害者への働きかけの強化を始めた。本学では、リサーチの役割を「当事者によるセミナー運営と開発」と整理し、運営の一部（司会進行など）を任せることにした。一連の活動を通じて、当事者メンバーは本プログラムの所属に誇りを持つようになり、学会で話題提供者を務め、全国の大学や関係者に向けて「知的・発達障害の若者と学生がフラットな関係で学べる機会が必要であること」を自分の言葉で発信するようになった。また、自分たちでプログラム紹介の動画を制作したいという意欲の高まりがみられた。学生も、教員に頼らず当事者と若者同士での活動を増やすことを希望し、自主サークル「さがっば当事者研究会」を結成した。

2024年度、前述の武部氏、並びに宮野雄太氏の2名が本学教員に就任。専任教員によるコーディネーターが増え、各活動の内容がさらに充実した。たとえば、リサーチのミーティングの回数は、前年度より倍近く増えている。

今後の課題は、セミナーへの参加数の増加、及びリサーチを担う新メンバーの育成である。そのためには、相模原市内の知的・発達障害の若者が、よりアクセスしやすい体制づくりが肝要となる。市との連携を強化しつつ、2025年度、市内の関連機関に本学の専任教員が向かい、本プログラムの魅力を伝えネットワーク構築を図るための取り組みを検討中である。

3. インクルーシブ生涯学習プログラムから「大学で学ぶ楽しみ発見プログラム」へ

本プログラム開発の開始当初、当時の中核メンバーが神戸大学での先駆的なプログラム（「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）」）を視察した。2024年度、中核メンバーに新たな教員が加わり、主体的に活躍するリサーチの当事者メンバーが増えたことから、新メンバーを中心に再び神戸大学及び関連事業を視察した。今回も視察を快く受けてくださった神戸大学の津田英二氏、ならびに関係者のみなさまに深く感謝する。

障害のある若者を対象とした生涯学習プログラムの開発は、全国で大学に限らず行政や福祉施設など様々な場で試行されている。そのうち大学という場所は、多様性のある若者同士が知的好奇心を基盤にフラットな関係性を築くという点において、最も有利な条件を備えている。全国の大学で障害のある若者と学生がともに「学ぶ楽しみ発見」を実現するための取り組みや工夫が広がることを願って、神戸大学の津田氏に許可をいただき、2024年度より本学でもこの名称を使用することとなった。

なお、名称の使用にあたって、本プログラムの運営を担うリサーチのメンバーには事前に相談し、賛同を得ている。彼らも視察に参加し、そこで多くの刺激を受け、自分たち知的・発達障害者に対する大学教育のあり方を主体的に考え続けている。

次の頁から、2024年度に実施した4つの活動、学会発表、神戸への視察について、教員・当事者・学生が協働でまとめ、報告する。当事者や学生が報告書用に原稿を作成する取り組みは、本プログラムの開発が始まって以来初の試みである。ぜひご覧いただきたい。

当事者のための生涯学習の場である「オープン・セミナー」(「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」)

【活動の狙いと成果】

武部正明 (統括コーディネーター・相模女子大学)

1. 概要

生涯学習プログラムである「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」(以下、セミナー) については、2025年度に4回を企画・開催した。第1部に「大学の先生の講義」、第2部に「就労ワンポイント講座」(働き続けるために必要なライフスキル)、第3部に「私の趣味自慢タイム」という構成は2024年度と同様である。また、インクルーシブ・リサーチメンバー(以下、リサーチメンバー)が「私の趣味自慢タイム」の運営・進行をする点も継続して担い、かつ2025年度は第1部「大学の先生による講義」のテーマ・講師案を立て、その中から4つのテーマについて4人の講師に講義をしてもらうことができた(図1)。

日程	内容	講師	申込期間	費用
第1回 9月28日	魅せる☆美しい映像とは? 注目度UPの撮影・演出テクニック	井坂 聡先生 相模女子大学	9月12日(木)	
第2回 10月12日	「わかる」って、どういうこと? 第2弾 常識にとらわれない 自由な思考力	伊東俊彦先生 相模女子大学	9月26日(木)	土曜日 10:30
第3回 11月9日	呼吸法による瞑想で自分をみつめる 「幸福」ってなんだろう?	石川勇一先生 相模女子大学	10月26日(木)	12:40
第4回 12月7日	明日から試したくなる「行動分析学」 気になる生活習慣 必殺!?改善法	後藤和宏先生 相模女子大学	11月21日(木)	

図1 「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」チラシ及び「さがみアカデミー」パンフレット

さて、今年度のセミナーの運営体制は、以下の通りである（表1）。

表1 セミナーの企画・運営体制

役割	担当
企画・運営	武部正明（統括コーディネーター）
事務局	相模女子大学夢をかなえるセンター生涯学習支援課 （さがみアカデミー）
当日の 会場運営	山根美月氏（コーディネーター；相模女子大学卒業生） 藤永珠希（相模女子大学4年生）
企画・当日 の進行	インクルーシブ・リサーチ・メンバー： 岩本健吾・小野詩菜・加登川俊太・今藤孝拓・水野克隆（勤労青年*） 丹沢桜子・常盤茜・待鳥双葉（相模女子大学4年生）

*リサーチ及びメディアのメンバーのうち、障害のある当事者を勤労青年と称している

また、各セミナーの日時と第1部のテーマ及び講師は以下の通りである（表2）。

表2 2024年度のセミナーの日時と第1部のテーマ及び講師

開催日時	第1部のテーマ及び講師
第1回 (2024年9月28日)	魅せる☆ 美しい映像とは？ 注目度UPの撮影・演出テクニック (相模女子大学人間社会学部 教授 井坂 聡氏)
第2回 (2024年10月12日)	「わかる」って、どういうこと？第2弾 常識にとらわれない 自由な思考力 (相模女子大学人間社会学部 教授 伊東 俊彦氏)
第3回 (2024年11月9日)	呼吸法による瞑想で自分をみつめる 「幸福」ってなんだろう？ (相模女子大学人間社会学部 教授 石川 勇一氏)
第4回 (2024年12月7日)	明日から試したくなる「行動分析学」 気になる生活習慣 必殺!!改善法 (相模女子大学 人間社会学部 教授 後藤 和宏氏)

※各回とも開催時間は10時30分～12時40分

セミナー各回のスケジュールは以下の通りである（表3）。

表3 セミナー各回のスケジュール

各回の構成	内容
オリエンテーション	事前説明
第1部（50分間）	講義（表1を参照）
第2部（15分間）	「就労ワンポイント講座」（講師 川口信雄氏）
休憩（10分間）	
第3部（50分間）	「私の趣味自慢タイム」※小グループに分かれて実施
	次回セミナーの案内及びアンケート記載（5分間）

2. 実施結果

4回のセミナーにおいて、参加者が回答したアンケートを集計した結果は、表4の通りである。

(1) 参加者について

表4 全4回のセミナー参加者の内訳

	参加者数 (申込者数)	性別 (アンケート回答者数)	所属	本セミナー の参加歴	主な参加理由 ※複数回答可 ※上位の項目を記載
第1回	26名 (28名)	21名 (男7:女14)	中学生1 大学生:9 就労者:9 就労支援利用者:1 その他:1	ある:11 ない:10	生活を充実させるため:11 仕事や就職に役立てるため:9 趣味を充実させるため(自分の趣味を話すなど):6 仲間や友人を得るため:5
第2回	25名 (30名)	25名 (男4:女21)	中学生1 大学生:13 就労者:10 就労支援利用者:1	ある:17 ない:8	生活を充実させるため:11 趣味を充実させるため(自分の趣味を話すなど):14 仕事や就職に役立てるため:9 仲間や友人を得るため:6 日常的な課題を解決するため:6
第3回	25名 (28名)	19名 (男7:女12)	大学生:6 就労者:12 就労支援利用者:1 その他:1	ある:14 ない:5	趣味を充実させるため(自分の趣味を話すなど):11 生活を充実させるため:10 仕事や就職に役立てるため:10 日常的な課題を解決するため:6 教養を高めるため:6
第4回	25名 (30名)	23名 (男9:女14)	中学生:1 大学生:7 就労者:13 就労支援利用者:1 その他:1	ある:21 ない:2	趣味を充実させるため(自分の趣味を話すなど):15 生活を充実させるため:14 日常的な課題を解決するため:8 仲間や友人を得るため:7

(2) 「第1部 講義」

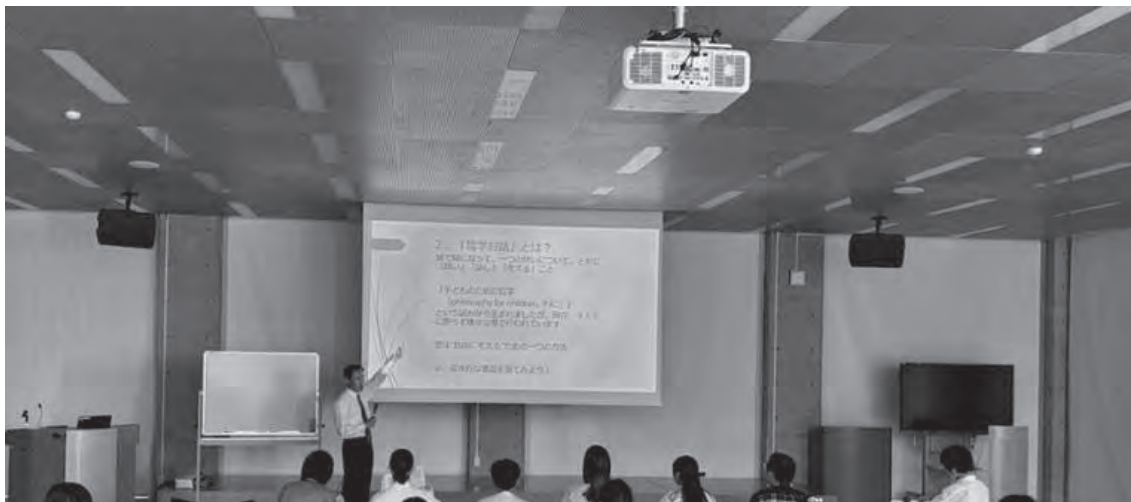
①満足度について

「とても満足」=5、「満足」=4、「どちらともいえない」=3、「やや不満」=2、「不満」=1として集計した結果、各回の平均は4.6~4.7で、満足度は高い結果であった。

②「良いと思った点」について

主な回答者の記述は、次の通りである。

- ・哲学対話で正解はないとの話で人生 生きていく中で完璧な正解はなく その時になって臨機応変で対応することが 大切だと思いました。
- ・瞑想を始めてしたので、とても貴重な体験ができました。
- ・聞くだけでなく、実際に（ワークに）参加しながら受講できる点
- ・（全体として）もう少し時間に余裕があれば良いと思います。



（3）「第2部 就労ワンポイント講座」

各回の平均は4.7～4.9で満足度は高い結果であった。参加者からは、「趣味紹介のポートフォリオなどで自分を表現する方法や普段関わらない方の意見を聞くことが出来てとても充実していました。」「一人暮らし体験型のグループホームのことなどを、ご本人の口から聞くことができて貴重なお話を聞けてよかったです。」「実際に社会人として平日働いていて、どのような余暇の過ごし方をしているのかを当事者の声として聞くことが出来た。」などの感想が挙げられた。



（4）「第3部 私の趣味自慢タイム」

各回の平均は4.8～5で満足度は高い結果であった。『私の趣味自慢タイム』のグループは、あなたにとってどのような場でしたか？』という自由記述での設問に対して、「今日は

珍しく女性人だけのグループで女子会みたいで楽しかったです。」「全体的な空気が優しくのびのびと自己表現ができる場でした」、「同じ趣味の人がいて楽しかったです」、「いろんな人の趣味をかけるいい場所」、「居場所のような場と感じました」などの回答が挙げられた。



(5) のまとめ

参加者の参加動機について、第1回は「生活を充実させるため」、「仕事や就職に役立てるため」が多かったが、第2回から第4回にかけて「趣味を充実させるため（自分の趣味を話すなど）」、「生活を充実させるため」へと変遷している。利用者のリピート参加者数が多いこと、第3部「私の趣味自慢タイム」の満足度が高いことから、第3部が参加者の重要な目的の一つとなっていることが伺える。また、第1部「大学の先生による講義」、第2部「就労ワンポイント講座」についても高い満足度が得られた。

本セミナーは、知的障害者の生涯発達支援の4領域における「学ぶ・楽しむ」、「くらす」、「かかわる」、「はたらく」（菅野，2021）を念頭に構成している。平日は職業生活、家庭生活を営む知的・発達障害者が、土曜日に本セミナーに参加して、生活の改善や働く意義を見直し、趣味を介した緩やかな仲間関係を構築する居場所とすることは、QOLを高める一つの要因になると考えられる。また、大学生にとっては、実際の年齢としては概ね同等か少し年上の働く知的・発達障害のある若者たちと講義や趣味を介したコミュニケーションの場となっている。授業等を中心に座学で学ぶ障害や福祉等の知識とは異なり、お互いが自分の趣味や体験などを話し、相手を知り、自分を知る機会となり得るのではないかと考える。なお、2024年度では、本セミナーに本学の卒業生2名が定期的に参加した（1名はコーディネーター、1名はボランティア兼連携協議会委員）。平日は仕事をしながら、土曜日に本セミナーに主体的に参加することこそまさに生涯学習と言えるのではないかと考える。

今後の課題は、より地域密着でのセミナーとするため、特に相模原市内での若者を中心に、啓発・動機づけを図り、アクセシビリティの良い仕組みづくりを相模原市と連携しながら構築することである。

ゼミ活動

宮野雄太（コーディネーター・相模女子大学）

1 はじめに

インクルーシブ・ゼミ（以下、「ゼミ」）とは、参加者である勤労青年とサガジョ生が、固定されたメンバーで繰り返し交流活動を行うものである。ゼミに参加する勤労青年は、インクルーシブ・セミナー（以下、「セミナー」）の参加者にコーディネーターが個別に声をかけ、参加を表明した者である。また、サガジョ生は、相模女子大学の人間心理学科で学ぶ学生に個別に声をかけ、参加を表明した者である。これまでのゼミの活動では、好きなものなど自分について語り合ったり、悩みを言葉にし合ったりする活動が行われてきた。

なお、セミナーも、前半に大学教員等から講義を受けた後に、後半に「私の趣味自慢タイム」という参加者同士が交流する機会が設定されている。そして、ゼミでもセミナーと類似した活動を行うことがある。しかし、セミナーは30人ほどが参加し、さまざまな関係者もいる中で進み、広いホールの中で行われるものである。一方で、ゼミは固定された少人数のメンバーで、大学の一教室で進められる。類似した活動であっても、設定や環境が異なることで、参加者の語りは、セミナーとゼミで質が異なるものになっていく。また、自分の悩みを言葉にする活動は、セミナーのように多くの人がいる環境では難しい。繰り返し顔をつき合わせたメンバーだからこそ話せることもあり、安全な語りの場としても、ゼミは機能する。

2 2024年度のゼミ活動の概要

2024年度のゼミ活動のメンバーは、勤労青年4名、サガジョ生4名であった。ただし、仕事の関係で、勤労青年のうち1名が実際にはゼミ活動に参加できなかった。2024年度の活動予定を表1に示した。9月から2月までに合計5回取り組むものとした。基本的に1回1時間程度としているが、「トリセツ相談会」を行う第4回ゼミ活動（1月25日）のみ3時間で計画をした。なお、本稿執筆時では、12月7日の第3回ゼミ活動を終えたところであった。第1回から第3回までのゼミ活動で中心的に取り組んだものは、「パーソナルポートフォリオ」であった（図1）。パーソナルポートフォリオは、「自分のプロフィール、好きなもの、学び、経験、身に付けてきたことなどを、1冊のクリアファイルにまとめたもの」のことである。パーソナルポートフォリオの導入は、まずファイルに「自分の好きなものを収めること」を推薦し、取り組んでいった。これは、セミナーで実施している「私の趣味自慢タイム」の延長線として取り組みやすいという理由があった。また、「自分の好きなものを収める」ことはとても楽しいプロセスであるから、パーソナルポートフォリオの導入として適しているという理由もあった。そして、パーソナルポートフォリオは、一度作ったら完成というものではなく、メンバーは次のゼミまでにページを追加・更新して、発表した。

第2回のゼミから取り組んだ『「はたらく」について話そう』は、テーマのとおりそれぞれが「働くこと」について語るものである。勤労青年はこれまで職場で体験したこと、高校段階でどのように学んでいたかなどを話した。サガジョ生は、アルバイトでの体験や就職活

動についてなどを話した（図2）。この活動は、次に説明する「わたしのトリセツ相談会」への橋渡しの役割も担う。

表1 2024年度のゼミ活動

日付	主な活動内容
入講式 9/21（土）9:00-10:00	・顔合わせ、自己紹介など
第1回ゼミ活動 9/28（土）9:00-10:00	・トーキングカード ・パーソナルポートフォリオの説明
第2回ゼミ活動 10/12（土）9:00-10:00	・パーソナルポートフォリオで交流 ・「はたらく」について話そう
第3回ゼミ活動 12/7（土）9:00-10:00	・パーソナルポートフォリオで交流 ・「はたらく」について話そう
第4回ゼミ活動 1/25（土）9:00-12:30	・わたしのトリセツ相談会
第5回ゼミ活動 2/1（土）9:00-10:00	・夢・なりたい職業発表会



図1 パーソナルポートフォリオ



図2 「はたらく」について話そう

第4回からは、「わたしのトリセツ相談会」を行う予定である。“トリセツ”とは「取り扱い説明書」の略であり、「メンバーが『現在職場で困っていること』や『将来職場で困りそうなこと』について相談し、皆が体験談等から意見を出し合う」という活動である。ホワイトボードを使って、相談と意見を記録しながら進めていく。相談会は4つの観点で具体的にを行う。4つの観点とは、「①どんな場面で」「②どんなことに困るか」「③自分にできる対策は何か」「④周囲にお願いしたいことは何か/お願いすると良いことは何か」である。この「わたしのトリセツ相談会」では、自分の悩みを自己開示することになる。また、他のメンバーの悩みに共感することで、自分の悩みがより言語化されてくるような体験をする者があることも想定される。そのため、「わたしのトリセツ相談会」は、ゼミという空間が悩みを相談できるような安心・安全を感じられる場であることが重要である。また、そのために、先

の「パーソナルポートフォリオ」を使ったメンバー同士の交流は非常に大切である。

最終となる第5回は、「夢・なりたい職業発表会」である。安心・安全な場で、自分の夢・職業を発表する場を計画している。

3 勤労青年とサガジョ生の姿：パーソナルポートフォリオの発表を中心に

ゼミ活動で「パーソナルポートフォリオ」の発表を行うときは、発表者が「披露して終わり」ではなく、メンバー同士が共感して聞くことが重要である。この点で、2024年度のメンバーは、お互いによく共感して発表を聞くことができていた。特に、他のメンバーがファイルに収めた内容に対して、“それ私も知っている”という思いが生じていたのが、共感して聞くことにつながっていたようであった。また、発表を繰り返すと、他のメンバーの「好きなもの」がわかり、そのページが更新されていく様子も、発表を聞くメンバーの楽しみになり、共感して聞くことにつながっているようであった。パーソナルポートフォリオに収められたそれぞれの「好きなもの」は全く異なっていたから、自分の興味のない話に共感できないメンバーがいても不思議ではないのだが、2024年度のメンバーは共感して発表を聞いている姿が見られた。

さらに、パーソナルポートフォリオに自分が表彰された様子を収め、披露できたメンバーがいた。「自分が表彰されたこと」を語るということは、思いの外に勇気のいることである。自分にとって大切な体験であっても、「他の人に伝えると『自慢している』と思われるかもしれない」、そんな不安をもって不思議ではない。今回のゼミで、自分が表彰されたことをパーソナルポートフォリオに収めて発表できたメンバーがいたことは、ゼミという場が安心・安全な場であったことの証拠でもあるだろう。

4 おわりに —成果と課題—

2024度に進行中のゼミは、パーソナルポートフォリオの取り組みを中心に、メンバーが「自分」や「悩み・不安」を語る場となっていくことができた。「家族や友達に語ることでできない内容をゼミでは語れている」という感想を述べるメンバーもいた。

ただし、ゼミの運営には課題もある。勤労青年は、仕事がある場合に参加が難しくなり、サガジョ生も就職活動や資格試験があると参加が難しくなったりした。メンバーの欠席があっても、活動に支障がないような運営が求められているといえる。メンバーのプライバシーに配慮しつつ、年度をまたいでデータを分析するなど、個人が特定されない方法による研究データの分析を検討する必要がある。

当事者による調査・研究活動である「リサーチ」（インクルーシブ・リサーチ）

1. 活動のねらいと成果

武部正明

（1）これまでの経過と 2023 年度の成果を踏まえて

2023 年度のリサーチ活動の成果として、①「ミーティング・リサーチ」と「アクション・リサーチ」の 2 軸での展開、②「インクルーシブ・メディア」との連動、③リサーチ活動を単年度だけでなく長期的な成果を意識することの 3 点であった。2024 年度もこの 3 点を軸に置きながら、1 つずつ形にすることを目標とし、一定の達成がみられたと考える。今年度はセミナー開催日や学会発表日などの関係で「アクション・リサーチ」と「ミーティング・リサーチ」を交互に組むことが困難であったが、メンバー内でセミナー前後の打合せやセミナーの意義などの話し合いは習慣化して、自発的なミーティングが可能となった（オンラインでのミーティングも適宜行った）。

（2）2024 年度の目標とスケジュール

リサーチ活動において、あらためて大切にしていること

2024 年度は、より勤労青年と学生の当事者の主体的な活動とするため、活動開始時期を 6 月からとして前年度より 3 か月ほど早めた。勤労青年も学生も忙しい日々の生活の中で、期間を長くすることで無理のないスケジュールとした。その中で、①障害のある若者、学生が主体的に参加したい、共に学びたいと思えるセミナーをつくること、②自分たちで企画・運営に関与して、「さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム」の主体者になっていくこと、③メディア活動と連携してセミナーを社会へ発信する役割にもなることを目的とした。

表 1 リサーチ活動のスケジュール

生涯学習 プログラム	エンパワメント・プログラム	
セミナー	リサーチ活動	メディア活動
	第 1 回 (6/22)	
	体験会 (6/29)	体験会 (6/29)
	第 2 回 (7/20)	第 1 回 (7/20)
	第 3 回 (8/17)	
セミナー① (9/28)	入講式 (9/21) 第 4 回 (9/21) 第 5 回 (9/28)	入講式 (9/21) 第 2 回 (9/21) 第 3 回 (9/28)
セミナー② (10/12)	第 6 回 (10/12)	第 4 回 (10/12)
セミナー③ (11/9)	第 7 回 (11/2) 第 8 回 (11/9)	第 5 回 (11/9)

	第9回 (11/30)	
セミナー④ (12/7)	第10回 (12/7)	第6回 (12/7)
	第11回 (1/25)	第7回 (1/25)
	第12回 (2/1) ※成果報告会	第8回 (2/1) ※成果報告会

メンバー同士では、以下の点を目標とし、一定の成果を得た。

- ①「さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム」及び「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」という名称について、あらためて全員で同意した。
- ②2023年度の話合い結果を踏まえ、2024年度のセミナーの4回分について、第1部のテーマ・講師の企画案を立てた。
- ③2024年度に引き続き、「私の趣味自慢タイム」の体験会を企画・進行することとして、全4回の進行を行った。
- ④2024年から2025年度の2か年における新たな目標を以下の通り立てた。

ア) 2024年度に、「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」の意義・効果について、「勤労青年にとっての意義・効果」、「学生にとっての意義・効果」、「課題と解消方法」を軸に話し合うこととした。

イ) 2025年度に、①をまとめ、その結果を例えばリーフレットにまとめて印刷して、神奈川県内の大学、特別支援学校、中学・高校通級指導教室へ郵送すると共に、本セミナーへのニーズについてアンケート調査をすることを計画した。

上記の議題のうち、セミナーに関することは事務局の生涯学修支援課と協議した上で、リサーチメンバーで1つずつ検討した。昨年度は「私の趣味自慢タイム」の進行を自分たちでトライして成功したこと、今年度はさらにセミナーのテーマや講師を決めたことだけでなく、各回のセミナー会場の検討も参加者の特性や利便性などを踏まえて提案するというこも行なった。このように段階的に勤労青年と学生が共に生涯学習プログラムの主体者となることは、「当事者にとって必要であること・希望すること」を、当事者自身で決めていくということに繋がっていくと考える。

大学としては、社会人である勤労青年には薄謝であるが謝礼を支払っている。また、当然のことながら各人の仕事や生活等の都合を優先しており、すべてのリサーチ活動の参加を義務づけているわけではない。あくまでリサーチ活動は、メンバーそれぞれの生活の一部であり、QOLの向上に寄与することが望ましいと考えているからである。

2025年度には、これまでの成果をもとにセミナーの意義をまとめてリーフレットにまとめる、ニーズ調査を行うということを検討していく予定である。

2. 学生にとっての学びと意義

常盤茜・待鳥双葉・丹沢桜子（相模女子大学人間社会学部人間心理学科4年）

（1）学生にとっての学び

今年度は、3人中2名がリサーチに所属して2年目ということもあり、全年度を通して感じた運営面での改善点を積極的に提案することができた。また、ゼミからリサーチに移籍したメンバーも、昨年度セミナーに参加した立場からの改善点や新しいアイデアを提案することができた。具体的には今年度の6月に開催された体験会、11月開催のセミナーで相模女子大学11号館を使用した。その際、参加者の方へ教室までの道をわかりやすく紹介した【道案内動画】を学生主体となって作成した。学生が参加者側の立場になって考え、参加者側が安心してセミナーに参加できるような取り組みを提案・実行した。

また、勤労青年の皆さんと共に学びを深めていく中で、社会人になるにあたって、仕事とプライベートの両立の方法などを学ばせてもらうことができたと感じる。

リサーチメンバーでの話し合いの際、勤労青年の方から「サポートしてくれてありがとう」等のポジティブな声掛けがあったことで、自分の意見や考えを伝えること積極的にできているといった声や、暖かい空気感での話し合いができているのではないかといい声も上がった。

（2）活動の意義

今年度は、セミナー開催前にリサーチメンバーの中でリーダーとサブリーダーを決定したうえで活動を行った。一年間を振り返って、「みんながリーダー」のような役割を果たしていたのではないかと振り返ってみて感じた。

特に話し合いの中で、議事録を作るメンバーや中心となって話を進めてくれるメンバーなど、障害の有無関係なく1人1人が自分の得意なことで活躍できる場なのではないかと改めて感じた。



(3) 今後の展望

来年度は開催機会の増設や、第3部「私の趣味自慢タイム」をにつながる「パーソナルポートフォリオ」の作成を行うセミナーを提案したいと考えている。例えば、相模女子大学の学園祭（相生祭）での出展を行うことで、人間心理学科の学生のみならず、他学科や高等部などの学生にも認知を広げることができるのではないかと考える。



3. 勤労青年にとっての学びと活動の意義

岩本健吾・小野詩菜・加登川俊太・今藤孝拓・水野克隆（勤労青年）

(1) 今年度の活動実績

今年度は『「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」の意義・効果について話し合い、勤労青年にとって・学生にとっての意義・効果、今後の課題と解消方法をまとめる』をテーマに、活動初日にリーダー・サブリーダーを決め、活動を行った。今年度の新しい試みとして3つの活動を行った。

1つ目は、セミナーの講師・講義内容決めを行った。以前は、大学教員で決めていた講義内容だが、今年度は、相模女子大学の教員を中心に、昨年度の参加者からの要望を取り入れながら、勤労青年・サガジョ生で決めた。回数も昨年度より1回増え計4回になり、今年度の講師は、第一回目が井坂聡先生の映像学、第二回目が伊東俊彦先生の哲学、第三回目が石川勇一先生の瞑想学、第四回目が後藤和宏先生の行動分析学に決定した。相模女子大学の教員を中心に講師を決めた理由として、毎年実施可能であること、そして比較的实现がしやすいためである。

2つ目はセミナーの体験会を行った。6月に「私の趣味自慢タイム」の体験を行う体験会を行い、セミナーに初めて参加した方でもわかりやすいように、実践説明を行った。3つのグループごとに部屋を分けて行い、体験後、グループごとにインタビューを実施し

た。参加者からは好評をいただいた。体験会で判明した改善点は、9月以降の活動までに時間があつたので、ミーティングで調整ができた。



最後に3つ目は、「セミナーの意義」についての話し合いを行った。勤労青年・サガジョ生の参加したきっかけ、セミナーの関心点、セミナーの自分自身の効果について、他のイベントとの差異などを話し合った。話し合った意見を元に、今後の課題と解消方法を来年度まとめる予定。

(2) 勤労青年にとっての学び

リサーチ活動はゼミとは違い、運営側として考えることが多く、学生、勤労青年関係なくフラットな立ち位置で話し合うことがとても楽しく感じた。私たちが通っていた高等特別支援学校では、就労をするために「勉強」より「就労実習」を重視されていたため、「学び」について考えること自体がほぼ無かった。そのため、この活動で自分たちが学びたいと思った講義、若者がどんな講義を受けたいのかを考えること自体が、私たち勤労青年にとっての学びになりえると思った。

(3) 活動の意義

活動が土曜日であることで、勤労青年・サガジョ生にとって行きやすい環境となっている。活動の雰囲気がとてもフラットかつ、対面で一緒に学び、男女、障害の有無関係なく楽しく学べるのが意義と感じる。そして、フラットな関係性を築くために、ニックネームで呼び合うこと、敬語ではなくタメ語で話してみたこと、活動の休憩中に一緒に話したりランチをしたりして親睦を深めたことなどを行った。

今まで実際の大学の授業に参加したことが無かったが、インクルーシブプログラムに参加して、大学生と同じように、考えて、学んで、というその時間自体が勤労青年にとっては、なかなか体験出来ないことなので、とても有意義な時間を送ることが出来た。そもそも、健常者と障害者は違う人種だと個人的に壁を作っていた。しかし、リサーチ活動を行うなかで、大学生が勤労青年を支援するのではなく、同じテーマで一緒に考え、一緒に答

えを出していくうちに、その考えもなくなっていった。「障がいの有無関係なく一緒に学べる事が出来る」というこの場が、もっと色々なところ（特に学校！）に広がってほしいと強く思う。



（４）今後の展望

今後の展望は大きく分けて２つある。

１つ目は、若者が楽しむためのセミナーを考えているが、今後、若者にセミナーの情報を届けるためには、マスコットキャラクターがあると良いと思う。例えば、デザイン学科のサガジョ生にキャラデザをお願いして作るなど、大学内でも別の学科との交流があれば、さらにインクルーシブな活動の幅が広がると考える。マスコットキャラクターには、宣伝だけではなく、そのキャラクター特有の活動もあると面白いと思う。ただ、そのための費用や労力がかかることが懸念されるため、安易に行えることではないと思うが、今後の活動の中で考えていきたい。

２つ目は、リサーチメンバーの中で、学生は１～２年で活動を終了し、メンバーの入れ替わりがある。勤労青年の場合、メンバーの入れ替わりがなく、毎年同じメンバーで活動しているので、今後は勤労青年が主体となって動くリサーチ活動をしていきたい。状況によって周りにサポートを求めることはあるが、可能な限り勤労青年中心に動くのが今後の課題だと思う。すぐに実行するのは難しいが、なるべく勤労青年中心で活動できるような体制作りから始めていきたい。

【当事者による普及活動：インクルーシブ・メディア活動の成果】

1. 概要

武部正明

インクルーシブ・メディア（以下、メディア活動）は、2022年度から開始した活動で、本プログラムを各地域に普及啓発することを目的としている。特に学齢期後半から青年期の障害のある方々とその家族、高等学校の先生方、大学関係者、一般の高校生や大学生などを主なターゲットとして、動画を制作・編集・YouTube 配信している。

メディア活動のメンバーは、これまでと同様、岩本健吾氏と今藤孝拓氏に加え、今年度からコーディネーターとなった地内亜紀子氏、ボランティアの小林太郎氏とし、サポーターとして宮地秀行氏（障害者スポーツ文化センターにて長年、障害者支援に従事。様々なスポーツ・文化活動を企画・運営等を担っている）、津布久守氏（宮地氏のもとでスポーツ・文化活動の映像制作等を行っている）に協力を仰いだ。

2. 活動報告

岩本健吾・今藤孝拓・地内亜紀子（コーディネーター）・小林太郎（ボランティア）

（1）今年度アップした動画の紹介

今年度は、セミナーの第2部「就労ワンポイント講座」について紹介する動画を作成した。主な取り組みは、ワンポイント講座の様子と、参加者へのインタビュー撮影。その後は、動画のシナリオ作成とともに、撮影した映像を選択して台本を完成させていった。台本作成は昨年度も経験したため、動画の構成決めは少しずつ当事者中心で行えるようになった。前回のシナリオを参考にし、どのように言葉をつなげていくのかを考えるのが大変だったが、簡潔かつ具体的に説明するのも「学習」の一つだと思う。「就労ワンポイント講座」は、就労や余暇活動をより充実させるきっかけにも繋がるので、就職に向けて準備をしている高校生や大学生、現在就労している社会人など、多種多様な方々にご覧いただきたい。

動画収録中の様子



(2) 今年度新しく始めたこと

①「1分動画作成」について

これまでメディア活動は、年に1回動画をYouTubeにアップロードをしていたが、今年度は5月から活動を開始し、11月までの半年間で1分動画を3つ作成した。そのきっかけは、1分を中心とした短めの動画の方が再生回数を伸ばしていけると思ったからである。「どんな動画を作成しようか?」と考え、1つ目は6月に「セミナー」の体験会があるのでその宣伝動画と、2つ目はセミナーの全体像を1分で紹介する動画を作ることが決まり、それぞれシナリオ作成と収録を行った。1分という短時間の中、「最も伝えたいポイントは何か?」を考えながら台本作成を進め、映像収録も無事終了し、5月～8月に2本の作品をあげることができた。

別件で、昨年度はセミナーの「私の趣味自慢タイム」をより具体的に紹介した6分の動画を作成。しかし6分動画はやや長いという意見が出たため、10月～11月は昨年度の動画の中から重要なポイントのみをフォーカスして、内容を凝縮したバージョンの動画を作ることになった。動画が完成したのでYouTubeにアップロードの依頼をした際に、「主な内容」、「見て欲しい対象(年齢等)」、「概要欄に記載する文章など」をまとめ、『動画の依頼票』を作成した。その結果、「動画の趣旨」等が明確に伝わるようになり今後、動画をアップロードする時は依頼票に文章をまとめる工程も追加となった。依頼票の提出が終了した数日後に、3作品目の動画がアップロードされた。1分の動画を観て「私の趣味自慢タイム」に興味を湧いてきたら、フルの(6分)動画もご覧いただきたい。

今年度作成した 1分動画3部作



「セミナー体験会の宣伝動画」



「セミナー全体像の紹介動画」



「6分動画の凝縮版」

5月のミーティングの様子



相模女子大学

インクルーシブ生涯学習プログラム (サイト)



②「テレビリポーターのようなインタビュー」について

昨年度まで、私の趣味自慢タイム終了後は、他のグループの様子を知ることができなかったので、今年度から各グループへのインタビューを開始した。テレビのリポーターのようにインタビューをすると、参加者側も盛り上がるのが予想されるので実行してみた。その結果、全体的に他のグループの様子や雰囲気が伝わるので楽しい会になったと思うので、今後のセミナーでも取り入れていきたい。毎年、参加者へインタビューをしているため、取材自体は問題なく行えていると思う。

基本は、あらかじめ考えてきた内容で取材を進めていくが、雰囲気などに合わせてその状況に合わせた質問もするので、臨機応変な対応も必要となる。また、インタビューは各グループのテーブルを回るので、中にはカメラに映ることを懸念している人もいるので、今後の課題として撮影NGの人がカメラに(一瞬でも)映らないようにするにはどうしたら良いのかを考え、また自分で解決策が浮かんだら、支援者に相談をし撮影やコミュニケーションのステップアップを目指していきたい。

リポーターのようにインタビューをしている様子



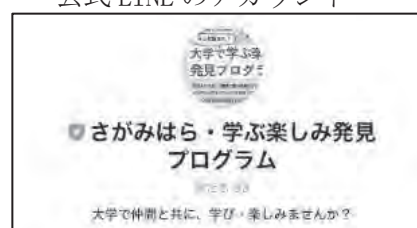
③「公式 LINE アカウント」について

今年度より、「さがみはら・学ぶ楽しみ発見プログラム」の公式 LINE アカウントが開設された。そこで我々メディアチームも少しずつ、学ぶ楽しみ発見プログラムやセミナーにまつわるお知らせを発信する体制を整えることができた。

公式 LINE に投稿する文章は、登録者全員が見る、すなわち全体公開するものなので多少の緊張感があった。もし、文章に悩んでしまった時は、支援者やサポートしてくれる人に相談することも可能なので、安心して文章を作成できた。

どうしたら見る人にわかりやすく且つ、心に届き、実際にセミナーに来ていただけるようにするかを考えて発信することが大切だと感じた。我々、当事者が情報を発信、また配信者

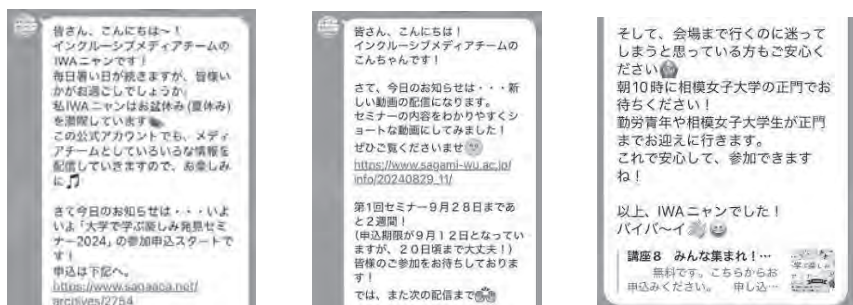
公式 LINE のアカウント



の名前を入れることにより、誰からお知らせが来たのかがわかるので、メッセージを見る側にも効果があったと思う。以前「インクルーシブ・ゼミ」に参加していたメンバーが「セミナーのお誘いのお知らせありがとうございます！」と配信者のLINEに連絡をしてくれたこともあった。

今後の目標として、公式LINEアカウントのメッセージ配信を、我々当事者中心で行えるようにしていきたい。「当事者がメッセージを配信することにより、タイムリーに投稿できる」とアドバイスをいただいたほか、「インクルーシブ・メディア」というのは、「エンパワメント・プログラム」の一つの活動なので、当事者中心で動いていくのがこれからの課題だと思う。まだまだ活動の内容を完璧に把握できていないので、当面は支援者にサポートを求めることが予想されるが、できる限り当事者中心で動ける体制を整えていきたい。

メディアチームが考えた文面



(3) 発信することの意義

実際に公式LINEやチラシ、動画を通じて発信してみて、そこから参加に結びついたこともあるので、とても意味があることだと思う。また、メディアメンバーの同級生がチラシを見て、来てくれたことがとても嬉しく印象に残っている。そして、実際に来てくれた人が良かったと感じてもらえれば、そこから様々な人に広がる可能性はあると思う。

(4) 今後の展望

現在は講師の方に動画編集を依頼しているが、今後は当事者の方で編集作業までできる体制を整えていきたい。そのために準備が必要なことは、インタビュー、カメラの技術をより習得し、メディアの基盤が完成次第、メディアのメンバーを増やして、共有を進めていくことだと思う。ゆくゆくは、現メンバーの今藤と岩本が、これまでの活動と両立を図り動画編集に着手できればと考えている。

また知的障がい者は物事を伝える、話すのが苦手な人も少なくないはず。我々、メディアチームの当事者も言葉に詰まったり、フィルターが多くなることもしばしば。話すのが得意不得意関係なく、発信する権利は誰にでもある。ネックに感じている部分、それは課題ではなく「その人の個性」ですから。今後は、「自分の障がいをカミングアウトする動画」の配信も

希望している。障がいのある人の個性をみんなで共感し合うのも「インクルーシブ」の一環だと思う。それに並行して「学ぶ楽しみ発見プログラム」のお知らせやセミナーの撮影やインタビューも、引き続き実施していきたい。

(5) どうしたら相模原市の若者にメッセージが届くか？

今の若者は、新聞やニュースよりも、SNS を通じた「X(旧 Twitter)」や「Instagram」、「TikTok」などの利用が多いと思う。現在、発信しているものが公式 LINE と YouTube のみなので、若者がどのようなサイトを閲覧しているのかをリサーチして、他の媒体でも「学ぶ楽しみ発見プログラム」のアカウントを作成していきたいと考えている。そして、チラシの配布も継続していきたい。

学会・視察報告

【日本発達障害学会第 59 回研究大会及び日本 LD 学会第 33 回大会での発表】

武部正明

1. 概要

2024 年度は、早稲田大学の梅永雄二氏を指定討論にお招きして日本発達障害学会、神戸大学の津田英二氏と文部科学省の星川正樹氏を指定討論にお招きして日本 LD 学会にて、自主シンポジウムにて、さがみはら学ぶ楽しみ発見プログラムについて報告した。また、日本 LD 学会が神戸での開催ということで、大会前に神戸大学及び「よるあーち」の視察を依頼し、ご協力いただいた。

2. 学会報告での感想と今後の展望（小野詩菜）

10 月 5 日に発達障害学会（國學院大學）、10 月 19 日に日本 LD 学会（神戸国際会議場）に参加し、インクルーシブ・リサーチを今藤（発達障害学会）、小野、水野（日本 LD 学会）、インクルーシブ・メディアを岩本が活動報告を発表した。

(1) 感想

発表直前は少し緊張したものの、大きくはっきりと声を出すことを意識して発表を行う事が出来た。途中、発表原稿通りに話せず、間違えてしまった箇所もあったが、そのことを気にせず、その後も話すことができ、良い発表ができた。質疑応答の中で、「インクルーシブを世の中に広めていくためには何が必要だと思うか？」という質問を受け、「まずはこのプログラムに参加して下さっている方に良いなと思ってもらえることが大事だと考えている。そこから家族や友人、知人に広まることで広がっていくと思う。更に、より多くの方に知って見てもらえるようにショート動画を作成し、ショート動画を視聴して知っていただき、プログラムへの参加に繋がって世の中に広まっていくのではないかと考えている。」と答えた。参加者からの質問に対して適切に回答することが出来て、良かった

と思った。(今藤)

初めての学会発表だったが、発表までに、スライド・原稿作成、発表の振分けをし、遅い時間まで大学に残り準備をしたので大変だったが、学会発表当日は、最後まで大きなトラブルも無く出来たので安心、達成感がある。学会というものに、触れることもなかったので、とても貴重な経験になった。(小野)

学会発表という初めての経験をさせていただき、大学の成果発表会とは違う場所、雰囲気、環境、人がいて、リハーサルの時点で緊張していたが、一緒に勤労青年メンバーや、大学の先生がそばにいたお陰で自信を持って発表することが出来た。仲間の力は最高だと思った。(水野)

笑顔や話すスピードを意識できたので、今後の連携協議会や成果報告会でも自信を持って発表をしていきたいと思った。家で発表の練習をした時、Zoomで録画をしながら話すスピードや声の出し方などをあらかじめ確認し、どの部分に気をつけて話した方が良いかを自分で考えながら発表できた。(岩本)

(2) 今後の展望

少し時間がオーバーしてしまったので、もう少し原稿を短く出来たかもしれないと思った。今回は、勤労青年のみの学会参加だったので、今後は学生も参加出来れば、さらにインクルーシブな活動だという事をアピール出来ると思った。発表の中で動画を流す際に、スクリーンに映っていない状態で、動画を再生してしまったので、今後の課題として原稿やPCだけではなく、スクリーンも確認しながら、発表をしていくように心掛けたい。

日本LD学会第33回大会(神戸国際会議場) 自主シンポジウム

「大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発・その3:当事者のニーズを踏まえた大学と行政の連携による地域での支援」(武部正明・日戸由刈・川口信雄・小野詩菜・水野克隆・岩本健吾・後藤成海・津田英二・星川正樹)



日本発達障害学会第 59 回研究大会（國學院大学） 自主シンポジウム

「知的・発達障害の当事者たちが企画・運営・発信するインクルーシブな生涯学習プログラムの開発：その 2」（武部正明・日戸由刈・宮野雄太・藤永珠希・今藤孝拓・岩本健吾・梅永雄二）



【神戸大学 KUPI 及び津田英二研究室、「よるあーち」の視察】

1. 視察の目的と概要

武部正明

今回、津田英二先生のご尽力により、KUPI の視察、神戸大学の訪問、よるあーちの視察を実現することができた。神戸大学学ぶ楽しみ発見プログラム（KUPI）は、日本では先駆的な知的障害者への生涯学習プログラムである。私たちの実践は、これまで KUPI を知り、学びながら、相模原市と相模女子大学で地域特性に合わせて生涯学習プログラムの開発に取り組んでいる。今回視察に行ったメンバーのうち、武部、宮野、小野、水野及び相模原市発達障害支援センター職員 2 名は初めて神戸大学を訪問した。今回の視察内容を参考にしながら、今後あらためて自分たちのプログラムを見直し、まとめていきたいと考えている。

2. 視察の詳細と感想

岩本健吾・小野詩菜・水野克隆

（1）神戸大学（津田研究室）

①感想

・「学ぶ楽しみ発見プログラム」（KUPI）のお話を聞いてみて、平日の夕方（仕事終わり）に大学で勉強できる機会があるのは学びたい社会人（KUPI 生）にとって、とても行きやすい環境だと思った。

・もともとは障がいのある人が大学の一般の授業を受けることを目的にしているのがわかり、相模女子大学とはまた別の魅力があると思った。

・KUPI は年間「5ヶ月間 ほぼ毎週（約 16 週間）」開催されているのを聞き、来年は、相模女子大学の「学ぶ楽しみ発見セミナー」の回数を年 5.6 回に増やしていきたいきっかけにもつながった。

②学んだこと

質疑応答の時間を設けてくださったので、津田先生への質問をさせていただきました。

Q、「基本的な合理的配慮の取り組みは、どのように行うのでしょうか？」

A.「一人ひとり(メンバー)の状況を把握して、みんなで話し合うことが大切！あとは、障がいのある人・無い人と分けるのではなく、みんなで解決することも大切！」

2024年4月より合理的配慮が義務化されたほか、今年度の「さがっば当事者研究会」のテーマが「合理的配慮について考えよう」だったので、どのような取り組みが必要なのかを質問してみた。ちなみに「さがっば当事者研究会」とは、「インクルーシブ・リサーチ」から派生したサークル活動で、勤労青年と相模女子大学の学生が「毎年テーマを決めて」そのテーマに沿った話し合いを進めている。

結果、津田先生のおかげで合理的配慮の基本的な取り組みを知ることができたので、今後のインクルーシブ・リサーチや「さがっば当事者研究会」で活動するヒントになった。

(2) カフェアゴラについて

神戸大学の6階には、障がいをお持ちの方々が働くカフェ「アゴラ」があり、様々な方たちの協力のもとで運営されている。「障がい者就労」、「知的障がい者の実習の場としての役割」もあるので、カフェで働きたい方や、仕事に関するスキルを向上したいと思っている方々に対して働きやすい環境を作っていると感じた。

津田先生から聞いたお話によると、現在アゴラで働いている方の中で、入社当時は一言も喋らなかったけど、あることがきっかけで元気になった。それは、大学のエレベーター乗っている時、他の方も乗って来たので、その方が降りる階のボタンを押してあげたら、「ありがとう♪」と言われ嬉しい気持ちになり、現在その方は「会計業務」もされているらしい。「ありがとう」という言葉で元気になるというのを学び、我々もよりいっそう感謝の気持ちを忘れずに活動しようというきっかけにつながった。

カフェアゴラで撮影した写真



津田研究室で撮影した集合写真



(3) よるあーち

「あーち」(灘区民ホール)の入り口の写真



入り口付近にある横断幕の写真



①感想

- ・館内の見学をしてみて、よるあーちの参加者と一緒にカードゲーム(UNO)で遊んだことが印象に残った。
- ・「あーち」にはピアノが設置されていて、津田先生の伴奏に合わせてよるあーちの方とジブリソングを歌って楽しい時間を過ごせた。
- ・仕事終わりに、ゲーム、お絵かき、勉強、歌をうたうなど趣味が合う人同士で楽しいひと時を過ごせる場所があるのは、一日の疲れを癒すのに効果的だと感じた。

②学んだこと

- ・よるあーちの説明は、実際に参加されている方が話してくださり、すごく具体的でどのような活動なのかがわかった。その方のように具体的な説明ができるようになりたいと思ったので、我々も発信する活動をよりいっそうしていきたいという気持ちが湧いてきた。
- ・まさに「自分の居場所」という形で利用されていたのが印象に残ったほか、フレンドリーな雰囲気だったのが良かった。我々も今後の活動で「フレンドリーな雰囲気」をより維持していきたいきっかけにつながった。
- ・障がいの有無関係なく、誰でも活動できる「サードプレイス(家や職場・または学校以外の第3の居場所)」の大切さがより理解できたので、「学ぶ楽しみ発見セミナー」でも多くの方々が「最高のサードプレイス」と思えるような居場所作りを「インクルーシブ・リサーチ」チームと検討していきたいと思った。

1. 各サブプログラムの位置づけの検討

2025 年度は、武部が本事業のコーディネーターとして 3 年目を迎えた。加えて、武部及び宮野が相模女子大学の専任教員となったことで、武部が統括コーディネーター、宮野のほか 2 名をコーディネーターとして配置することとなった。新たな大学での実践を検討するワーキンググループの一つとして位置づけられ、生涯学修支援課が事務局を担っている点はこれまでと同様である。ただ、関与する人員が多くなることで、あらためて各サブプログラムのねらいとその位置づけを図 1 のように整理した。

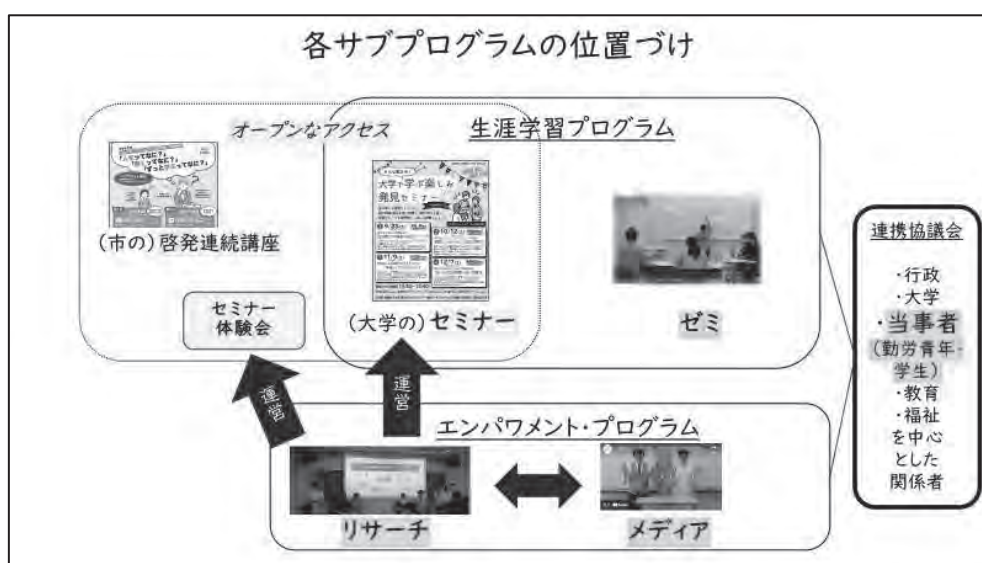


図 1 さがみはら学ぶ楽しみ発見プログラムにおける各サブプログラムの位置づけ
(日本 LD 学会第 33 回大会にて発表)

さがみはら学ぶ楽しみ発見プログラムの特徴は、以前から挙げているように、①相模原市と相模女子大学が連携して、地域の中で知的・発達障害のある若者が生涯学習プログラムを地用しやすい環境を構築しようとしている点 (e. g. 連携協議会の設置)、②知的・発達障害のある若者 (勤労青年) と大学生が共に「学ぶ・楽しむ」ことができるインクルーシブなプログラムを開発していること、③②のプログラムには「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー (以下、セミナー)」や「ゼミ」の発展形としての「エンパワメント・プログラム」を設けていることである。

①相模原市との連携の意義は、知的・発達障害者のプログラムへのアクセシビリティの向上にあると共に、より広く普及啓発していることであると考えます。特に、相模原市発達障害支援センター主催の「啓発連続講座」は、特別支援学校や福祉の就労支援事業所と大学でのセミナーとを繋ぐ重要な機能がある。「啓発連続講座」は今年度が 2 年目で、参加者数も増えてきているが、セミナー参加への接続には課題がある。今後、例えば「啓発連続講座」に

て、リサーチ・メディア活動をしている勤労青年と学生と一緒にセミナーの楽しさを伝えるような時間を設けてもらうなどの工夫もよいかもしれない。また、特別支援学校への広報活動なども有効と考えられる。試行錯誤ではあるが、市とより密な連携を行いながら、相模原市の若者が少しでも多く参加できるような仕組みづくりを検討していく必要がある。

2. 当事者主体の活動とその意義

エンパワメント・プログラムであるリサーチ活動とメディア活動は、勤労青年と学生が主体者となることができるように試行錯誤しながら展開している。2024年度からリサーチ活動とメディア活動とが一体運営できるようにしたこと、2025年度はさらにリサーチメンバーがセミナーを舞台にして利用者である若者のために、参加への動機づけが高まるようなテーマと講師を選定する、若者同士が楽しく趣味・関心事を話すことができるような進捗を担う、そしてそのふり返りを行ってセミナーの改善点を議論するということをくり返した。さらに、こうした体験を交えながら「セミナーの意義」を話し合ってきた。リサーチメンバーがセミナーでの参加者の様子を観察し、感想を聴き取るという作業は、当事者による調査活動であり、「Inclusive Research」(Walmsley, J & Johnson, K, 2008) の概念に相当する。学会、連携協議会、成果報告会などでその結果や考察を当事者自身が語ることは、それを聴く同じ若者やその家族、支援者、行政関係者などにとって大きな説得力を持つはずである。

今回、日本 LD 学会第 33 回大会で指定討論をしてくださった神戸大学の津田英二氏から「リサーチ活動及びメディア活動は、当事者によるセルフアドボカシーといえるのではないか」、「日頃のリサーチ活動での積み重ねは、最終的に世の中の仕組みを検討するような場で意見を述べることにつなげていく必要がある」という趣旨のご指摘をいただいた。現状ではまだ本プログラムの意義をいかにエビデンスに基づいて主張できるかを模索しているところであるが、その先には当事者が公式の場で生涯学習プログラムの意義と必要性を、彼らの言葉で発信するというのも一つのアウトプットかもしれないと考えるに至っている。

もう一人の当事者として位置づけている学生にとってもプログラムの意義、教育効果を言語化する必要がある。国際的な研究論文を読むと、先行する諸外国における大学での知的障害者の教育機会に関する研究報告の多くは、当然ながら知的障害者の学びの効果の検討であり、メンターと一緒に学ぶ学生への効果は検討されていない。本プログラムのように勤労青年と学生が対等な協働関係の中で、プログラムの運営に主体的に関与することは新たな取り組みといえるのではないか。就労している人生の先輩でもある勤労青年と共に活動することは、これから社会に出ていく学生にとって何にも代えがたい経験である。

私は今回 KUPI を視察させていただき、津田英二氏の著書「生涯学習のインクルージョン」(津田, 2023) を読み、KUPI における知的障害者の語り的重要性を学んだ。引き続き、「エンパワメント・プログラム」に参加する勤労青年と学生の語りにより耳を傾け、研究報告をはじめ様々な機会を活用して社会に発信する役割があると感じる一年でもあった。本事業にご協力くださった多くの皆様に心からの謝意を表し、引き続きご示唆を賜りたい。

学び続ける大切さを伝える「啓発講座」

相模原市発達障害支援センター

【背景と目的】

令和3年度から相模女子大学が主体となってインクルーシブ生涯学習プログラムの開発を進め、発達障害や知的障害がある若者と学生が同じ当事者として共に考え、やりたいことや必要な支援を自ら発信していく『当事者の主体性を尊重する活動』の在り方を一つのモデルとして提示することができた。次の段階として、発達障害や知的障害がある若者に本プログラムの活動をどのように認知・理解してもらい、参加を促すかという点が課題となっていた。

そこで、相模原市では令和5年度に引き続き、これから社会に出る若者やその家族、教員、支援者に対して学校卒業後の生涯学習の重要性について理解促進を図ることを目的に啓発講座を開催した。また、講座を通じて、『好きなことを学ぶ』という考えに触れ、相模女子大学主催の『大学で学ぶ楽しみ発見セミナー』への参加に繋げることもねらいとした。

【令和6年度の特徴】

令和5年度の啓発講座実施後のアンケートには「当事者にとっては分かりづらい部分があった」という意見の一方で、「もう少し踏み込んだ説明がほしかった」という意見もあった。これは、講座の対象を当事者も含め広く設定したことにより、結果的に『誰に何を伝えるか』が曖昧になってしまったからだと捉えた。講座の参加者に確実に伝えるため、今年度は第1回を当事者向け、第2回を保護者・教員・支援者向けと対象を分けて開催した。また、支援者が仕事として参加できるよう開催日を平日と土曜日に設定する他、申込期間を長く設定する等、参加しやすい環境を整えた。

【内容】

タイトル	「人生ってなに?」「働くってなに?」「ずっと学んでなに?」
日時	第1回：8月2日（金） 13時～15時半 第2回：9月14日（土） 13時～15時半
テーマ	第1部：社会人生活準備講座 ～学校卒業後の進路は？ 中高生からできる準備は？～ 障害者雇用の実際 ～現場で求められることとは？～ 第2部：対談で学ぶ社会人生活 ～働きながら学びを楽しむ先輩に聞いてみよう！～
講師	第1部：北条 達氏（株式会社 LITALICO パートナーズ） 槻田 理氏、渋谷 彩香氏（富士ソフト企画株式会社） 第2部：川口 信雄氏（株式会社はまりハ 顧問） 小野 詩菜氏、水野 克隆氏、岩本 健吾氏、今藤 孝拓氏 （インクルーシブ・プログラム開発協力者）
形式	相模女子大学および Web 会議システム Zoom のハイブリット形式

【周知・広報活動】

チラシ配布、プレスリリース、ホームページ（市・相模女子大学）、市広報紙、メール配信等を活用して周知を行った。なお、主なチラシの配布先は、市内支援学校、市内インクルーシブ教育実践推進校、福祉研修センター、相模原市自閉症児・者親の会、市 PTA 連絡協議会、障害者スポーツ協会、教職員研修講座、市関連窓口等。

【実施結果】

参加人数について、第1回の事前申込者数は70名で、当日は68名（会場34名、オンライン34名）参加。会場参加者の内訳は、当事者15名、保護者・家族6名、教員8名、支援者5名。第2回の事前申込者数は79名で、当日は53名（会場16名、オンライン37名）参加。会場参加者の内訳は、当事者5名、保護者・家族5名、教員3名、支援者3名であった。

<アンケート満足度>

第1回：36名回答

- ▼満足…22名（61%）
- ▼やや満足…8名（22%）
- ▼どちらでもない…4名（11%）
- ▼未記入…2名（6%）

第2回：31名回答

- ▼満足…26名（84%）
- ▼やや満足…3名（10%）
- ▼どちらでもない…2名（6%）
- ▼未記入…0名（0%）

<アンケート自由記述（抜粋）>

当事者	「働くために、ライフスキル（身辺自立）や、自己肯定感を持つ、ポジティブなコミュニケーション能力の必要性を理解できた」「第2部では実際に当事者から直接仕事のことから趣味のことまで聞くことができ、自分の生活に活かせることは活かしていきたいと思った」等
保護者 家族	「余暇が充実している人は折れにくいこと、楽しむ力＝余暇力ということをお聞きして、本当に成人後の余暇は大切だと思った」等
教員	「第2部冒頭の勉強する意味についての話が印象に残っている。どのような学習機会を創出すると良いのか考えるとともに、自分のこれまでの学習経験についても考えさせられた」等
支援者	「社会に出る前から自身の得意分野を見つけたり、自己表出を通して他者と心の交流をしたり自信を身につけたりすることは、心の拠り所や時には仕事につながり、本人の強い希望となることを理解した」等

【今後に向けて】

本講座は上記のアンケート結果のとおり、一定の評価を得ることができ、参加者にとって生涯学習の重要性を知るきっかけになったのではないかと考える。今年度の課題点としては、昨年度に比べ申込者数は増えたものの、特に第2回では、当日キャンセルにより申込者数と実際の参加者数の差が大きかったことが挙げられる。これは、申込開始日を第1回と合わせたことで、当日までの期間が長く空いてしまい、参加意欲が下がった方や、他の予定を優先させた方が多くなったのではないかと推察した。そのため、次年度に向け申込期間やリマインダーの時期を検討していきたい。

また、第2回では、普通高校に通う高校生が数名参加し、アンケートでは「今まで知る機会がなかったが、たくさんの学びがあった」という感想を受けた。生涯学習の大切さを広く啓発していくためには、当事者やその家族、教員、支援者だけでなく、一般市民の方に興味を持ってもらうための周知方法や工夫が必要であると気付くことができた。

今後も啓発講座を通して、社会生活を送る上では就労だけではなく、生涯学習や余暇の充実がメンタルヘルスや生活の質の向上に繋がるということをより多くの人に伝えていきたい。

令和6年度インクルーシブ・プログラム開発事業 連携協議会

連携協議会では、発達障害や知的障害の若者にとっての生涯学習の意義について、市内の教育・福祉の関係者、有識者の間で共通認識を図ることを目的に、当事者を交えて意見交換を行う。今年度、生涯学習プログラムの研究・開発について協議した内容を報告する。

<委員>

所属等	氏名
(株) はまりハ 顧問	川口 信雄 (会長)
東京学芸大学大学院教育学研究科 教授	藤野 博
信州大学医学部 子どものこころの発達医学教室 教授 附属病院子どものこころ診療部 部長	本田 秀夫
神奈川県立津久井支援学校 校長	星野 進
神奈川県立橋本高等学校 教頭	柴山 克久
神奈川県立上鶴間高等学校 教頭	前澤 喜仁
社会福祉法人相模原市社会福祉事業団 地域支援課 課長	村山 毅
社会福祉法人風の谷 施設長	西村 三郎
相模女子大学 副学長	中村 真理
相模女子大学 総務担当理事 (事務局長)	本橋 明彦
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授	狩野 晴子
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表	岩本 健吾
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表	今藤 孝拓
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表 (相模女子大学 卒業生)	下村 爽香
インクルーシブ・プログラム開発協力者代表 (相模女子大学 学生)	常盤 茜
相模原市市民局スポーツ推進課 課長	加藤 千恵子
相模原市健康福祉局地域包括ケア推進部 高齢・障害者福祉課 課長	沼田 好明
相模原市教育委員会教育局学校教育部 教育センター 所長	奥津 光郎
相模原市教育委員会教育局学校教育部 青少年相談センター 所長	折原 奈帆
相模原市教育委員会教育局生涯学習部 生涯学習課 課長	松本 隆人

<事務局構成員>

所属等	氏名
相模原市こども・若者未来局陽光園 所長	山本 克哉
相模原市こども・若者未来局陽光園 発達障害支援センター 所長	中山 千春
相模原市こども・若者未来局陽光園 療育相談室 室長	頼本 鏡子
相模原市こども・若者未来局陽光園 発達障害支援センター 主査	川崎 祐介
相模原市こども・若者未来局陽光園 発達障害支援センター 主事	後藤 成海
相模原市こども・若者未来局陽光園 発達障害支援センター 主事	曾根田 杏奈
相模女子大学人間社会学部人間心理学科 教授	日戸 由刈

相模女子大学人間社会学部人間心理学科 准教授 統括コーディネーター	武部 正明
相模女子大学学芸学部子ども教育学科 専任講師／コーディネーター	宮野 雄太
横浜市総合リハビリテーションセンター／コーディネーター	地内 亜紀子
(株) はまりハ／コーディネーター	山根 美月
相模女子大学夢をかなえるセンター 部長	有田 雅一
相模女子大学夢をかなえるセンター 生涯学修支援課 係長	横田 智子

第1回 会議録

会議名	令和6年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第1回連携協議会	
開催日時	令和6年6月29日(土) 15時～16時30分	
開催場所	相模女子大学 マーガレット本館1階 会議室1	
出席者	委員	16名：川口信雄氏、星野進氏、前澤喜仁氏、村山毅氏、中村真理氏、本橋明彦氏、狩野晴子氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、下村爽香氏、常盤茜氏、加藤千恵子氏、沼田好明氏、奥津光郎氏、折原奈帆氏、松本隆人氏 欠席者：藤野博氏、本田秀夫氏、柴山克久氏、西村三郎氏
	事務局	13名：山本克哉、中山千春、頼本鏡子、川崎祐介、後藤成海、曾根田杏奈、日戸由刈、武部正明、宮野雄太、地内亜紀子、山根美月、有田雅一、横田智子
議題等	(1) 令和5年度成果について (2) 令和6年度事業計画について	
議 事 の 要 旨		
<p>学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業及び令和6年度連携協議会について、事務局(市)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>また、本協議会会長選出について、互選により川口委員が会長に選出され、承認された。</p> <p>議題(1) 令和5年度成果について 本事業のこれまでの経緯について、川口会長より資料に基づき説明がなされた。 事務局(市及び大学)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>(2) 令和6年度事業計画について 事務局(市及び大学)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>【意見交換】※抜粋 岩本委員：セミナーの『私の趣味自慢タイム』では、当事者が運営や司会進行、書記をすることで、「あの時の当事者がいる、あの時の司会者がいる」「このメンバーがいるから自分も参加したい」と思ってもらえるのではないかと。また、当事者の中で勤労青年は毎年変わらないが、相模女子大学の学生は卒業してメンバーの入れ替わりがある。初めて参加した方が安心できるよう、なるべく全体の運営メンバーの入れ替えが激しくならないようにしたい。今までセミナーに参加した方がリサーチ活動へ繋がっていくと、勤労青年の運営メンバーも増えていくのではないかと。と思う。</p>		

常盤委員：昨年度から本事業に参加している。始めは講義で習った印象が強く、勤労青年の方はどのような人たちなのかと思っていたが、実際に会って活動すると、とても明るく積極的に意見を発してくれていた。このような社会人の方との関わりは本事業ならではのと思う。また、学内の先輩方と上下関係を築くことができたのも貴重な経験であった。昨年度の活動はとても楽しく、自分の第三の居場所になりつつあると感じた。

下村委員：『私の趣味自慢タイム』で自分の趣味を自慢している時、参加者は楽しそうに話したり、相手に分かってもらえるよう夢中になったりしている。そのような姿を見て、障害がある方とない方の違いがなくなると感じた。また、障害がある方と関わったことがない人がこの活動に参加することで、「関わってみると意外と普通に接することができるんだな」「障害があるからといって身構える必要はないんだな」という発見にも繋がるのではないかと感じている。

星野委員：特別支援学校卒業後は進路として就労を目指すことが多いが、生徒は卒業後の自分の姿や、豊かな生活を目指すにはどうすれば良いのかを想像することが難しいという現実がある。その中で、卒業後の学びを支援するという本事業の活動は、とても意味深いことであると感じた。現在は学びの姿が多様化しており、当事者が参加できる機会は増えてきているが、障害がある方は参加するという一歩目が難関で、一歩目が踏み出せると次に繋がることのできる。そういう意味では「安心して参加できる」「参加者を楽しませる」というこの活動のコンセプトは、参加のハードルを下げて良いと思う。障害がある方はメディアを見て参加するより横の繋がり参加する方が多いのではないかと思う。学校でもこのような活動を伝えていきたい。

前澤委員：昨年度の報告と今年度の計画を発表してもらい、たくさんの機会を作っていただいていると感じた。このような機会を宣伝しながら、活用できれば良いと思う。

村山委員：多くの方から余暇事業やサードプレイスが大切という相談を受けている中で、今まではスポーツやおでかけ等の余暇支援が多かったが、本プログラムはアカデミックであり、勤労青年と学生が主体性を持って取り組んでいるという部分が素晴らしいと思った。

本橋委員：本事業は4年目を迎え、年々充実している。より当事者の意見が取り入れられていると感じている。このプログラムを全国的に広めていくことが本事業の目的の一つであるが、まずは学内で周知しながら広めていくことを目指したい。

加藤委員：スポーツ推進課では、共生社会の中で障害の有無に関わらず、皆でスポーツに取り組んでいくということを計画している。先日、知的障害の方がいるサッカークラブと市長面会の機会を設けたが、選手の方が一生懸命に楽しそうにサッカーの話をしている姿が印象的であった。そういった方々への協力や理解に取り組んでいかなければならないと強く感じた。今後も本協議会を通じて様々な方から意見をいただき、自分の仕事に反映させたい。

沼田委員：障害がある方で、就労の継続がなかなか難しいという方は多いと思う。少しでも多くの方が啓発講座に参加し、「人生ってなに?」「ずっと学んでなに?」というテーマを学ぶと、就労継続に繋がるのではないかと感じる。ぜひ参加者を増やしてもらえればと思う。

以上

第2回 会議録

会議名	令和6年度 学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業 インクルーシブ・プログラム開発事業 第2回連携協議会	
開催日時	令和6年11月30日(土) 14時～15時30分	
開催場所	相模女子大学 夢をかなえるセンター4階 ガーデンホール	
出席者	委員	14名：川口信雄氏、藤野博氏、柴山克久氏、村山毅氏、西村三郎氏、中村真理氏、本橋明彦氏、狩野晴子氏、岩本健吾氏、今藤孝拓氏、下村爽香氏、常盤茜氏、奥津光郎氏、折原奈帆氏 欠席者：本田秀夫氏、星野進氏、前澤喜仁氏、加藤千恵子氏、沼田好明氏、松本隆人氏
	事務局	13名：山本克哉、中山千春、頼本鏡子、川崎祐介、後藤成海、曾根田杏奈、日戸由刈、武部正明、宮野雄太、地内亜紀子、山根美月、有田雅一、横田智子
議題等	(1) 事業の経過報告について ア 啓発講座 イ プログラム報告 ウ 神戸大学視察 エ 日本発達障害学会、日本LD学会 オ 成果報告会 (2) 令和7年度事業について	
議 事 の 要 旨		
<p>議題(1) 事業の経過報告について</p> <p>ア 啓発講座 事務局(市)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>イ プログラム報告 事務局(大学)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>ウ 神戸学視察 事務局(大学)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>エ 日本発達障害学会、日本LD学会 事務局(大学)より資料に基づき説明を行った。</p> <p>オ 成果報告会 事務局(大学)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p>議題(2) 令和7年度事業について 事務局(市)より資料に基づいて説明を行った。</p> <p>【意見交換】※抜粋</p> <p>今藤委員：日本発達障害学会ではインクルーシブリサーチについて発表した。発表自体は自分一人で行ったが、「みんなで発表しているんだ」という気持ちを持って臨むことができた。質疑応答では「どうすればインクルーシブを広めることができるか」という質問を受け、来てくれた人に良いセミナーだったと思ってもらうこと、その方々から周りに広げてもらうことだと答えた。事前に想定していない質問であったが、自身で考えながら答えることができるようになったと感じる。</p> <p>西村委員：下村委員のお話を聞き、現在の仕事でも本事業の経験が活きていると思った。その施設だけでは収まらない、地域の中に出ていくというマインドは、このようなゼミ活動の中で築かれたのだろうと感じた。また、このプログラムでいうピアとは、障害の有無ではなく、同年代という括りの活動であるという点が重要だと感じた。</p>		

柴山委員：今年度からインクルーシブ教育実践推進校に着任し、いろいろなものを目の当たりにしている状況であるが、「一緒にやっていきたい」という意思や気持ちを持つ生徒が多いと感じている。「周りに自分が困難を抱えていることを言わないで欲しい」という生徒もいれば、「言ってみんなに理解して欲しい」という生徒もいる。そのような中で学校では、教員も生徒も共生社会の中で一緒に学んでいくという意識づくりや心づくりから取り組んでいるところである。

折原委員：セミナー活動での『お互いにお互いのことを知る』という機会がとても大事であると感じた。大学生や勤労青年の年齢だけではなく、小学校や中学校の段階からもこのような機会の場を作るために何かできることはないだろうか。本日はそのようなことを考えるきっかけをいただいた。

奥津委員：昨年度から、皆さんの主体性はどこから来ているのかといつも思いながら連携協議会に参加している。主体性を持って参加しているから、この取組がどんどん良いものになっている。また、決してやらされておらず、皆さんが楽しんで参加していると強く感じた。現在、学校の先生方に研修を行う教育センターに所属している。『インクルーシブ教育とは』という定義も大事であるが、本日皆さんから教わった楽しむことの先に、本当のインクルーシブの意味があるような気がしている。そのようなことを伝える研修機関でありたいと感じた。

中村委員：今年度のセミナーに参加した際には、当事者の方々、卒業生、学生の皆さんが主体性を持ち、自分たちで考えて企画し、リーダーシップを持って運営している姿を見ることができ、大変感銘を受けた。学生と勤労青年の間に何も無い、フラットな関係で双方が学びを得て、お互いに変わっていくという流れができ、それが成果になっていると感じることができた。

狩野委員：インクルーシブ・プログラム開発協力者代表として参加した皆さんから、実際にプログラムに参加して自分がどのように成長したかという部分を聞いて良かった。勤労青年の皆さんは楽しく一生懸命に活動しており、皆さんにとって自分の成長を実感できるとても良い場である一方で、実際に仕事をしながらプログラムに参加することが負担になる部分もあるのではないかと感じている。その負担が大きくなりすぎると継続が難しくなるため、そこに対して十分なペイをする、仕事として認める等、継続できるような体制作りを行えば良いと感じた。また、連携協議会の場では学生や勤労青年の皆さんから、プログラムの良いところだけではなく、今後より良くしていくためにどうしたらよいかという部分もお聞きしたいと思った。

藤野委員：本事業の立ち上げ時から委員として関わっているが、大学と自治体が連携していることや、大学のカリキュラムの中に位置付けられていることが素晴らしいと感じている。また、勤労青年や学生が非常に主体的に活動されているという点が印象的である。動機付けの部分では、お互いに押し付けではなく、本当に自分がやりたいことや好きなことだからこそ活動が続いていくと感じた。この事業の最終的な成果物として、いろいろな地域や大学の実情に応じた汎用できる支援のパッケージができると、本学の取組を進める上でのヒントをいただけるため、ありがたいと感じている。

以上

「共に学び、共に成長する

インクルーシブ教育がつくる新しい大学のカたち」

連携協議会会長 川口信雄

1 インクルーシブ・プログラムの一番の特徴は「共に変わる」こと

相模女子大学を舞台にしたインクルーシブ・プログラム（大学で学ぶ楽しみ発見プログラム）は、「学び」と「遊び（余暇）」の夢のコラボであり、大学が当事者青年に休日の居場所（第3の居場所）を提供する試みである。平日は企業等で働く青年が週末は、大学で大学生と共に学びキャンパスライフを楽しんでいる。参加者の中には筆者が開校にかかわった横浜わかば学園（横浜市立若葉台特別支援学校）の卒業生が十数人参加しており、一度参加するとリピーター率も高い。大学で同年代の大学生と学ぶ経験は、卒業生たちに「社会人としての誇り」を実感させてくれる。これは働くことへの意欲にもつながっている。

就労は大切だが、そこがゴールではない。ゴールは社会の中で豊かな人生を送ることにある。そのためにも学校卒業後に学び続ける場があることは重要だ。しかも、障害の有無に関係なく共に学ぶ場が。そして、大学はそのリソースとして最適だと考える。一方、大学生にとっても社会に出る前に彼らと共に学ぶ経験は自己理解の深化や障害感の変化をもたらす等大変貴重である。当事者青年と大学生は「共に学ぶことで共に変わる」ことができるのだ。

2 当事者主体、全学的な支援体制、市との協働が深まった2024年

今年も連携協議会の進行役を務めさせていただいた。その質疑応答では委員である当事者青年や大学生、大学卒業生からの意欲的な発言が多く、実際にプログラムに参加して思ったことや考えさせられたことをたくさん発信してくれた。このことは学識経験者や学校、福祉、行政の専門委員の方々からも高く評価されている。また、日本発達障害学会や日本LD学会では当事者青年が「大学で学ぶ意義」を自らの視点から堂々と発表しただけでなく、指定討論においても「どうすればインクルーシブを広めることができるか」といった質問に、当事者の立場から自らの言葉で応えていたことに感銘を受けた。そこには2006年に世界中の障害当事者が参加して「国連障害者権利条約」を作成した時の合言葉「私たちのことを私たち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」を想起させるものがあった。

相模女子大学の全学的な支援体制も強化された。セミナーの講師は毎回バラエティに富んでおり、その選定には当事者青年と大学生からなるリサーチチームがあたった。大学事務局がセミナーの参加申込や会場設営、成果報告書制作などの諸事務、相模原市との調整やチラシ、Web ページなどの広報活動にも尽力くださった。そのおかげもあり、今年度はマスコミや外部からの取材や見学が増え、TV放映もされた。

相模原市は連携協議会や大学との連絡調整会議の運営、2回にわたって開催された啓発講座の企画運営、文部科学省委託事業計画書の作成や事業に関係する文部科学省との折衝などにおいて行政の専門家としての知見を発揮してくださった。

相模女子大学は大学の相模原市は行政のそれぞれの得意分野を活かしながら昨年度より一段と内容の濃い協働体制を構築したと言えよう。「当事者主体」、「全学的な支援体制」、「市との協働」は本プログラムの一押しポイントであり、これからインクルーシブな学びを導入しようとする大学にとってもひとつのヒントになると考える。

3 世界では大学におけるインクルーシブな学びが広がっている

ここで目を転じて世界の状況を見てみよう。アメリカ、カナダ、オーストラリア、韓国、イギリス、アイルランド、アイスランド等の大学では知的障害があっても本人の意志を認め、一人の大学生として受け入れているケースが数多く報告されている。この背景には2006年に採択された国連障害者権利条約の存在がある。同条約、第24条、第5項には

締結国は、障害者が差別なしに、かつ、他の者との平等を基礎として、一般的な高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受することができる

とあり、アメリカではこの条約を受けて2008年にそれまでは経済的に苦しい学生への支援が対象だった「高等教育機会均等法」を改正し、知的障害者の高等教育機会の拡充まで広げた。その結果、2024年現在で348の大学が知的障害者を学生として受け入れている。大学の受け入れの「カタチ」は様々で、長谷川氏はそれを次の3種類に分類している。

- ① 完全統合型：全く同じ講義を一般の大学生と一緒に単位取得のない聴講生として受講
- ② 完全分離型：一般の大学生とは別に知的障害者の人が所属するクラスを大学内に開設
- ③ ハイブリッド型：ライフスキルや就労支援は知的障害者のクラスで学び、スポーツや音楽、アートなどは大学の講義に参加

(長谷川正人『知的障害者の大学創造への道』クリエイツかもがわ2019)

4 日本の現状とこれから

わが国の特別支援学校(知的障害)高等部卒業生の大学等への進学率は1%未満と極端に少なく、就職か福祉かの二択を迫られている現実がある。日本の大学には彼らが学ぶ場はほとんど用意されていない。わが国も2014年に国連障害者権利条約を批准しているが、アメリカのような具体的な法改正が行われていないこともあり、知的障害者が「一般的な高等教育」を享受することは困難な状況にある。条約批准国として大学におけるインクルーシブな学びは喫緊の課題と言えよう。特別支援学校高等部卒業生にも大学生にも「障害の有無に関係なく、大学で共に学べる場」が必要だ。抜本的な法改正がない今できるのは「生涯学習」におけるインクルーシブな学びであろう。

相模女子大学を舞台にしたインクルーシブ教育は6年目を迎えているが、現在もよりよい「カタチ」に向けて試行錯誤の途上にある。日本各地の大学でその大学に合ったインクルーシブ・プログラムが試みられ、その大学に合った「カタチ」が創造されていくことを切望している。「もっと学びたい」「キャンパスライフを楽しみたい」という当事者青年に大学での学びの場が広がることは、大学生にとってもかけがえのない学びの時となるのだから。

広報・メディア掲載

相模女子大学のホームページに本事業の特設サイト（※1）を設けた。6月・9月に事業にかかるプレスリリース（次頁に掲載）の他、市広報誌（広報さがみはら）でのセミナー告知等により広報活動を行った。これにより、以下のメディア等への掲載があった。

- タウンニュース（さがみはら南区版）2024年10月10日号
違い、同じを交流で感じて～インクルーシブな学び場6年目
<https://www.townnews.co.jp/0302/2024/10/10/754354.html>



- J:COM ジモトトピックス（相模原・大和）12月14日、15日放送
障害の有無に関わらず学びを！「大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」

- シンリラボ 私の本棚（20）『生涯学習のインクルージョン—知的障害者がもたらす豊かな学び』（津田英二著） | 武部正明
<https://shinrinlab.com/mybook20/>



- LITALICO 発達ナビ 2024年11月21日更新 ブログ記事
成人し、親元を離れて暮らす発達障害娘が自ら見つけた居場所。「大学に進学したい」思いに重なる青年期のインクルーシブ・プログラムとは <https://h-navi.jp/column/article/35030326>



参考※1

- 相模女子大学・相模女子大学短期大学部 ホームページ
インクルーシブ生涯学習プログラム
<https://www.sagami-wu.ac.jp/longlife/inclusive/>



Press Release

報道関係者 各位



2024年9月5日

9/28 相模女子大学 障害の有無にかかわらず「学ぶ楽しみ」発見と学び合う仲間をつくるセミナー開講 文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」を受託する相模原市と連携・協力 発達・知的障害のある若者が大学で学ぶ機会と同世代で交流する居場所をつくりたい

相模女子大学・相模女子大学短期大学部（所在地：神奈川県相模原市南区、学長：田畑雅英、以下「相模女子大学」）は、2024年9月28日より1回（9月28日、10月12日、11月9日、12月7日：各回で申し込み）、生涯学習講座「秋季さがみアカデミー」において「みんな集まれ！大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」を開講いたします。本セミナーは発達障害や知的障害のある若者が、同世代の同じ興味・関心を持つ仲間とともに大学で学ぶ楽しみを見つける4回連続の講座です。セミナーの受講を通して学生や市民と交流しながら、身近なテーマを専門的に楽しく学ぶ体験をするとともに、発達障害や知的障害のある若者に対する家庭・職場以外の「第三の場」を作ることを目的としています。



6月29日の体験会でのグループワーク「私の趣味自慢タイム」の様子



株式会社はまり八顧問 川口信雄氏
就労ワンポイント講座を担当
(元横浜わかば学園主幹教諭)



セミナー企画開発・広報PRに携わる障害当事者の若手スタッフ
こんちゃん（左）、IWAニヤン（右）（youtube動画はQRコードから）



文部科学省の「学校基本調査」によると、大学での障害学生在籍率は0.66%（2015年）とされており（※）、障害のある生徒は高校卒業後「大学へ進学して学び続ける」という選択肢が少ないのが実情です。（※文部科学省「障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）」より）そこで文部科学省は「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」を実施しています。本事業のうち「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」事業を相模原市が受託しており、相模女子大学は相模原市からの再委託を受けるという連携・協力体制のもと、2021年度から障害者を包摂する学習プログラムである「インクルーシブ生涯学習プログラム」開発事業を実施しています。

この「インクルーシブ生涯学習プログラム」は、2019年に株式会社はまり八顧問の川口信雄氏（元横浜わかば学園主幹教諭）が相模女子大学の日戸由川教授（人間心理学科教授、専門は障害者障害児心理学）に「卒業生の中に、『本当は大学で学びたかった』という声が多くなく、発達・知的障害の若者と学生がともに学ぶ場をつくりたい」という熱意を伝えたことから、日戸ゼミ内の交流活動として始まったことがきっかけです。2023年度の「インクルーシブ生涯学習プログラム」は全3回のセミナー累計で74人の参加がありました。本プログラムの企画・運営は、障害当事者の働く若者が中心となって行われ、セミナーのニーズ調査のほか、YouTube等を活用したプログラムの広報活動を行っています。

4年目となる今回のセミナーでは、相模女子大学の教授4名が講師を務め、「スマホやデジカメを活用した撮影・演出テクニック（9/28）」「常識にとられない自由な思考力（10/12）」「呼吸法による瞑想で自分を見つける（11/9）」「行動分析学（12/7）」を講義します。各回とも、第2部は横浜わかば学園で障害児教育に携わった株式会社はまり八顧問・川口信雄氏から就労に向けたワンポイント解説講座、第3部は参加者同士の交流促進を目的としたグループワーク「私の趣味自慢タイム」を行います。本セミナーに先駆け6月29日に開催した体験会の参加者からは「日本は高校まで特別支援学校があるのに大学はない。高校卒業後も学び続けたかった」「仕事以外ではなかなか友達ができないので、このような近い世代と交流できる場があることがとても嬉しい」という声がありました。相模女子大学は、今後も相模原市と協業し、発達・知的障害のある若者や学生と共に「学校卒業後も学び続けることのできる居場所づくり」を行ってまいります。

【2024年度秋季さがみアカデミー「みんな集まれ！大学で学ぶ楽しみ発見セミナー」概要】

開催日：2024年9月28日・10月12日・11月9日・12月7日（すべて土曜日） 10:30～12:40

場所：相模女子大学 夢をかなえるセンター4階 ガーデンホール／11号館2階 1124教室
（住所：神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号）

対象：中学生から30代まで

内容：第1部：講義（約50分）第2部：「就労ワンポイント講座」（約15分）第3部：「私の趣味自慢タイム」（約30分）

申込方法：右記QRコードのHP内にある申込専用フォームから各回ごとにお申し込みください。



【本件に関するお問い合わせ先】

相模女子大学 広報事務局 米澤智子（ワンパーパス株式会社内）

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号

TEL: 080-5083-6834 / e-mail: t-yonezawa@onepurpose-pr.com

学園キャラクター
さがっば・ジョー



学会・出版物への掲載（2024年度）

学会発表

学会名	発表・シンポジウムのテーマ	発表者・著者	開催・出版時期
日本発達障害学会第59回大会 (神奈川)	自主シンポジウム③「知的・発達障害の当事者たちが企画・運営・発信するインクルーシブな生涯学習プログラムの開発：その2」	【話題提供】武部正明・宮野雄太・日戸由刈・藤永珠希・今藤孝拓・岩本健吾 【指定討論】梅永雄二(早稲田大学)	2024年10月
一般社団法人日本LD学会第33回大会 (神戸)	自主シンポジウムJ1-10「大学と行政の連携・協働を通じたインクルーシブな生涯学習プログラムの開発・その3:当事者のニーズを踏まえた大学と行政の連携による地域での支援」	【話題提供】武部正明・日戸由刈・川口信雄・小野詩菜・水野克隆・岩本健吾・後藤成海(市職員) 【指定討論】津田英二(神戸大学)・星川正樹(文部科学省)	2024年10月
神奈川県共生社会実践セミナー (神奈川)	学生・当事者による活動発表(発表タイトル「相模女子大学さがっば当事者研究会発表」)	【発表】常盤茜・待鳥双葉・水野克隆・加登川俊太	2024年12月
日本発達心理学会第36回大会 (東京)	ラウンドテーブル「発達障害のある子ども・若者の特別な興味に基づく余暇活動支援」の中で 「『特別な興味』を活かした、若者同士のインクルーシブな交流活動」(話題提供)	【話題提供】藤野博・加藤浩平(東京学芸大学)・関根礼子(NPO法人ネストジャパン)・日戸由刈 【指定討論】別府哲(岐阜大学)	2025年3月 ※予定

学術書・雑誌への掲載

【書籍】本田秀夫(編)「講座精神疾患の臨床：9神経発達症群」の中で「余暇活動支援」, 中山書店	日戸由刈	2024年5月
【雑誌】特別支援教育研究 2025年2月号：特集「自閉スペクトラム症支援の最前線」の中で「キャリア発達支援の動向：青年期を中心に」	日戸由刈	2025年2月 ※予定

おわりに

おわりに

相模女子大学 副学長 中村真理

相模原市と相模女子大学の連携・協働事業である「インクルーシブ・プログラム開発事業」は「生涯学習プログラム」と「エンパワメント・プログラム」を2つの柱に据え、参加者が自己実現を図りながら共生社会を構築する基盤を目指している。この取り組みの特長は、単なる支援活動に留まらず、当事者が主体的に関与することで自尊感情や社会的スキルを育成する点にある。

第一の柱である「生涯学習プログラム」は、オープンセミナーと固定メンバーによるゼミ活動が核となっている。特に、オープンセミナーでは多様な学びの形式（講義、趣味共有、インタビュー形式）が採用され、幅広い参加者層を取り込む工夫がされている。ゼミ活動では、参加者間の継続的な交流を通じて自己理解を深めることができる環境が整備されており、当事者の精神的健康や自己肯定感の向上に寄与している。

第二の柱である「エンパワメント・プログラム」はセミナー運営、リサーチ活動、メディア活動という3本柱により構成されており、当事者が運営や研究、社会発信に主体的に関与できる仕組みを整えている点で先進的である。特に、メディア活動では、当事者が動画制作に関与することで自己表現力を高めると同時に、社会に向けた情報発信を実現している。当プログラムにおいて、当事者がセミナーのメンターやリサーチ活動の主演として活躍する場を持つことで、自信やスキルの向上を確認することができる。また、当事者がロールモデルとして新規参加者を引き込む役割を果たしており、持続可能な好循環を生み出していると言える。また、地域社会との連携や、大学・学生を巻き込んだピアサポートモデルは、共生社会を形成するための重要な基盤となっている。

プログラムを継続していくためには、安定的な財源と人材の確保が重要である。また全国で展開するには、地域ごとの特性に応じた柔軟な対応も求められる。インクルーシブ生涯学習プログラムは、当事者主体の運営や地域社会全体の関与を通じて多くの成果を上げているが、その一方で持続可能性の確保が課題となっている。当プログラムの取り組みは、共生社会の実現に向けた重要なモデルケースであり、他地域への波及を含めたさらなる発展が期待される。

相模女子大学では、人間社会学部・人間心理学科と学芸学部・子ども教育学科のコラボレーションにより、2025年度から学科横断プログラムに「こどもとこころ 発達支援プログラム」を導入する。学科横断プログラムは、各学部・学科での学修に加えて、学科を横断したプログラムを提供し、学生のキャリア形成を支援するもので、全学の学生に対して開かれている。「こどもとこころ 発達支援プログラム」では、こどもの発達にとって重要となるインクルーシブな環境を作り、一人ひとりが健康で充実した生活をおくる成人となることをケア・サポートするための知識やスキルを実践的に学ぶ。この学びが学生自身と当事者の自己実現と共生社会の実現をさらに促すものとなることを期待している。

おわりに

相模原市こども・若者未来局長 伊藤秀俊

相模原市では、令和3年度から「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」、令和5年度からは「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」を文部科学省より受託し、相模女子大学と連携・協働して「インクルーシブ・プログラム開発事業」に取り組んでまいりました。この取組では、障害があっても同世代の若者と同じように仲間と過ごし、自分の好きなことについて学びを深めることにより、豊かな人生を送るための生涯学習や余暇活動の在り方を考え、実践してきました。

本事業は、大学教員をはじめとする支援者がプログラム内容を提示し、発達障害や知的障害のある若者がプログラムに参加するという、一方的な「支援する・される」関係性ではなく、障害のある若者と学生が同じ当事者として支援者と共に考え、話し合い、やりたいことや必要な支援を自ら発信する取組です。また、この取組を講座や広報、学会等で紹介していくことにより、障害や生涯学習への理解促進を図っています。

障害者権利条約の批准や障害者差別解消法の成立等により、障害者に対する生涯学習機会の確保や、合理的配慮の提供が求められています。このような状況の中、障害者基本法に基づく障害者基本計画では「生涯を通じた多様な学習活動の充実」、教育基本法に基づく教育振興基本計画では「障害者の生涯学習の推進」が明記され、共生社会の実現を目指した様々な施策が展開されています。

本市におきましても、令和6年3月に「第2期 共にささえあい生きる社会 さがみはら障害者プラン」を策定し、障害のある方の生涯学習機会の充実、自立や社会参加の促進を図り、共生社会の実現に向けた取組を進めているところです。

今後も教育や福祉分野など、障害のある方の生涯学習機会の拡充に取り組む多様な主体の皆さまと連携・協働しながら、共に学び、生きる社会の実現に向けた取組を進めてまいりますので、引き続き皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、本事業の実施にあたりご尽力いただきました相模女子大学の皆さまをはじめ、プログラム開発協力者の皆さま、貴重なご意見をいただきました関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和6年度（2024年度）文部科学省委託事業
学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」

行政と大学の連携・協働を通じたインクルーシブ・プログラムの開発
—当事者が主体となって地域に働きかけ、交流や仲間づくりを推進するために—

2025年2月発行

相模原市発達障害支援センター

〒252-0226 神奈川県相模原市中央区陽光台3丁目19番2号 TEL 042-756-8411

相模女子大学

〒252-0383 神奈川県相模原市南区文京2丁目1番1号 TEL 042-742-1411（代）